
はじめての異世界 ~ The descent of an evil god ~

宮里 新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじめての異世界〜The descent of an evil god〜

【Nコード】

N3675X

【作者名】

宮里 新

【あらすじ】

1000年以上生き続けている高校生、龍也。ある日、龍也はクラスメイトと共に異世界へと落とされてしまう。異世界へ落とされた龍也はとある目的のため異世界の国々を渡り歩く。一方異世界では暗黒教団と呼ばれる組織が邪神を復活させるため動き出そうとしていた。

陰陽師系異世界ファンタジー、ここに開幕！

読み始める前に（前書き）

陰陽道についてです。作中であまり詳しい説明が出来ませんので入れておきます。

読み始める前に

陰陽道とは

定義

・ 古代中国の思想が元になって占い、呪術、等々を日本で体系化したもの。

陰陽五行説

・ 古代中国の思想で陰陽道の元となった。陰陽五行説は陰陽説と五行説が合体したもの。

陰陽説

・ 世の中に存在する全ての事柄を陽と陰の2つの性質に分けて理解するという思想。

例、太陽と月、昼と夜、明るさと暗さ、男と女、左と右、白と黒、等々。

前者が陽で後者が陰に当たる。

五行説

・ 世の中の事柄を木 火 土 金 水の5つの性質に分けて、5つの性質が五行相生と五行相克を繰り返すことによって森羅万象の全

ては成り立っているとする思想。

以下は『五行相生』の説明

『木生火』… 木は熱すれば火気を生ずる

『土生金』… 土中に『金』がある

『水生木』… 水が植物を育む

『火生土』… 火が燃えて土（灰）を生ずる

『金生水』… 冷えた金属は表面に水を生ずる

以下は『五行相克』の説明

木剋土… 木は土から養分を奪う

土剋水… 土は水の流れをせき止める

水剋火… 水は火を消す

火剋金… 火は金属を溶かす

金剋木… 斧などの金属で木を切る

木 > 土

土 > 水

水 > 火

火 > 金

金 > 木

読み始める前に（後書き）

いかがでしたでしょうか。なお、作者は陰陽道の専門家では無いので間違っている可能性やキーワードが抜けている可能性は大いにあります。

なお、ここに書いてあることはあくまで基礎知識です。より詳しい説明が知りたい場合はセルフでお願いします。

第1話 「強魔」 (前書き)

本作には陰陽道が出てきますが本作の陰陽道はアレンジしてあります。その点をご了承くださいの上お読み下さい。

第1話 「強魔」

今の時刻は午前2時、草木も眠る丑三つ時。そんな時間、深夜の学園の前に2人の人間の姿があった。

1人は男、肩まで伸ばした黒髪に鋭い目つきをした少年。もう一人は女、腰元まで伸ばされた金髪に翠色の瞳をした少女。

「……そろそろ行くぞ、エミリイ」

「ええ、そうね龍也」

そうして2人は深夜の学園へと入って行った。

コツンコツン

と先ほどの少年…龍也が真つ暗な廊下を歩いている。

「…やけに静かだな本当にここに妖がいるのか？」

少年の疑問に答えるものはいない。エミリイとは広い学園内を探索するため入り口で別れたからだ。

「ふむ、やはり入り口でエミリイと別れたのは失敗だったかな」

龍也がエミリイと別れたことを後悔し始めた時、

「きやああああああああああああああああ」

女性の悲鳴が夜のとばりを切り裂いた。

「ちい！」

龍也は舌打ちをすると悲鳴の聞こえた方へ駆けた。氣によって強化された龍也の聴力は悲鳴がした場所まで正確に特定する。

「…2階庭園部か！」

この学園私立宵闇学園には教室棟2階部分に広大な庭園があり悲鳴はそこから聞えた。

「起きたか？ここは”妖”の造りだした異空間だ」

目を覚ました女子生徒の疑問に答えたのは整った顔立ちの少年…龍也。

「…あなたは？」

「俺か？…俺は…正義の味方だ」

得られた答えがあまりにも予想外だったのか女子生徒は絶句する。

「…すまん、本当は違う」

「…でしようね、本気で言っているのだったら少し引くわ」

場の空気に耐えられず龍也が白状する。

「俺の名前は安藤 龍也…君は…確かうちのクラスで学級委員長をしていたよね？名前は確か歳掛…」

「結よ…さいかけ ゆい…結と呼び捨てで良いわ」

名前が出てこない龍也に痺れを切らし結が名前を名乗った。

「それで結、君は何で深夜に学校に居たんだい？」

「…分らないわ…頭に霧がかかったみたいにな何も思い出せない…何これ？」

結は自身の記憶を掘り起こす。

「では質問を変えよう…記憶はどこまである？」

「夕方…友達と別れて…それから…っっ！」

結は突然襲った痛みを抑えた。

「わかった、もう良い…これは夕方妖に襲われたみたいだな…いざ捕食しようって時に俺達が来たから囿に使った…てところか、しかし…」

「…ねえ、さっきから言ってる妖って何？」

結は自分の考えに没頭し始めた龍也に問うた。結は自身が訳の分からないことに巻き込まれ、知らない単語が出てきたことが不安なのだろう。

「ああ、妖ってのはな…」

妖あやしとは夜に活動を活発にする人外の化け物の総称、妖は人間に害を成す存在である。勿論、妖が全て人間に害を成す訳ではなく普通は人間と共存している。だが極一部の妖は人間を餌だと断じ捕食する。故に”霊能院”と呼ばれる組織に所属する特異な異能を持った者が人間に害をなす妖を日夜駆逐している。

「それで俺は霊能院に所属する異能者ってわけだ」

「…なるほど、つまり私を襲った奴がその悪い妖って訳ね」

結は持ち前の理解力を総動員して龍也の話を理解する。

「……ところであなたの持つ特異能力って何？」

「ん？…俺の特異は陰陽道だ。陰陽道は氣を使ってな…こんなことが出来る」

龍也はそう言うのと氣を収束させて劍を作る。収束された氣は目に見えるようになり、氣が使えない結にも見えるようになった。

「っっ…うそ…みたい」

結は驚きのあまり言葉を忘れてしまったかのよう呆然としている。

結にとって氣とはアニメや漫画の存在で、まさか現実に使える人間が居ると思っていなかったのだ。

「……ついでだもう1つ見せてやる…っっ！」

龍也は氣で出来た劍を自分の腕に振り下ろし切り落とした。

「な！…何をやってんの！」

「……顕現レベル1」

驚愕し慌てる結をよそに龍也は魔法の言葉を唱えた。すると龍也の腕が何事も無かったかのように元に戻った。

「……なに…これ？」

結は驚愕した、それも当然の反応であろう、なにせ切り落とした龍也の腕が何事も無かったかのように戻っていたから。

「これが俺の特異能力…顕現だ」

『顕現』

・顕現は肉体の機能全てを強化することが可能な肉体強化系の能力。従って筋力のみならず視力、防御力、聴力、なども強化され更に顕現を発動することによって肉体的なダメージが全てリセットされる。ただし顕現は1日に5回しか使えない。顕現のレベルはレベル1〜レベル10までありレベルが上がる程強くなる。

「と言うわけだ」

「無茶苦茶な力ね…ところでコレなんとかしてくれろ…気味が悪くて仕方がないわ」

結は足元に落ちている龍也の腕を指差した。

「…ふむ、わかった…生火・火焰」

龍也は術で落ちた腕を焼き払い一瞬で骨にする。

「続いて生水・流河川」

流也は空気中の水分を気で操り水の奔流にして骨を流した。

「…陰陽道って便利ね」

「まあな…これが俺の持つ特異能力だ……………本当はもう1つあるけどな」

龍也は結に聞えないように呟いた…

「ところでこの場所からは出られないの？」

「ああ、この異空間は”強魔”と呼ばれる空間を操る妖が造り出した空間だからな。強魔を倒さない限り出られない」

結は赤黒い空を見上げ龍也に問う。その表情には不安が広がっている。

>……とは言ってもこのままではジリ貧か。加えて異空間には食べ物も水も無い。このままではいずれ栄養失調で倒れるだろう、恐らくはそれが強魔の狙いだろう……

能力に見合わず臆病な奴だと龍也は一人ごちた。

「はあ…仕方ないな、結！俺の傍に来い」

「？…何とうし…ひゃあ！」

龍也は結を呼ぶと抱きかかえた。

「ななな…何すんのよ！」

「黙ってる！……生木・樹海濃霧！生火・呪禁炎！生土・鋼盤断壁

！生金・切断地獄！生水・水仙雲！」

龍也は自身の上空に5色の氣球を浮かべた。青・赤・黄・白・黒とそれぞれの色をした氣球は龍也の氣

を吸収し大きくなる。

「……この…位…か」

自身に秘められた莫大な氣の半分程を消費し10m程の大きさの氣球を造り出す。

「結…少々痛いかもしれんが我慢しろ」

「何！？…何をするの！？」

龍也は結には目もくれず自身と結を残り半分の氣で覆い守る。

「行くぞ…秘術・滅界！」

龍の掛け声を受け5色の氣球が混ざり合い反発し合う。そして反発が臨界点を越えた時大爆発を起こした。

その大爆発は強魔の造り出した異空間を消し飛ばし位相の異なる空間に身を潜めていた強魔も大爆発に呑まれ消えて逝った…

「ああ、外の空気がこんなにおいしく感じるなんて…生きていてって素晴らしい！」

「良かったな貴重な体験が出来て」

「……あなたは一回死ねばいいと思うよ…」

その後2人は異空間を脱出したは良いが反動で上空3000mの地点に放り出されパラシュート無しのスカイダイビングをさせられた。「ヒドイ！ヒドイわ結ちゃん！……結局、”飛行符”使って助かったんだから良いじゃん」

「空飛べるなら早く言いなさいよ！何で地面スレスレで使うのよ！」

「え？面白いからに決まってるじゃん」

龍也は「何言ってるのこの人」とでも言うような表情をして結に言い返す。

「……もういいわあなたと話して居ると疲れる。私帰るね」

「おう、またな！気を付けて帰れよ結」

龍也は去っていく結の背中に言葉を掛けた。

「……あの子、生かしておくの？」

「ああ、妖云々は知られても問題ない……”幻想世界”については話していないし」

龍也はエミリイへ返事を返すと空を見上げた、夜明けが近いのか空は白ずんでいた。

「エミリイ……行くぞ」

「はい」

そうして龍也とエミリイは唐突にかき消えた、2人が去った後には闇があるだけだった。

第2話 「私立宵闇学園」

翌日朝、

ジリリリリリリッリリリリリッリリリリリッリリリリリッリリリリリ

静かな朝に目覚ましの音が鳴り響く。5畳半ほどの室内には実用性を重視した武骨なタンスと勉強机それとベッドしかない。必要最低限のモノしかない部屋が主の正確を表している。

「・・・朝か・・・」

目覚ましの音で少年、安藤 龍也は目覚めた。

「うん、今日も気持ちのいい朝だ」

龍也は呟くと服を脱ぎ始めた。秘技を使いパジャマの上下を同時に脱ぐ。

「お兄ちゃんいつまで寝てるの！朝はちゃんと起きろって何回も言っ
つて・・・」

「よう！おはよう、かなえ」

その時、妹のかなえが部屋に入って来た。龍也はかなえの方へ向き直り挨拶をした・・・全裸で。

「き」

「き？」

「きゃあああああああああああつあああああ」

朝の陽光の下かなえの悲鳴が響いた。

~~~~~

「もお〜信じらんない！何で朝から全裸になっているのよ！」

「なんだ知らなかったのか、俺はいつも朝は全裸だぞ」

頬に赤い紅葉を付けた龍也がかなえに言葉を返す。

「し、知るわけないでしょ、このバカ兄！」

「兄に向かってバカとは何だ！バカとは大体・・・」

「~~~~~もう！私、部活行ってくるからね！」

かなえはそう言っ出て行ってしまった。1人残った龍也は世の中の不条理に嘆きながらパンを啜える。

朝食を終えた龍也はリビングに置いてある仏壇に手を合わせる。飾つてある写真はかなえの両親。かなえの両親はかなえが生まれて直ぐ事故で亡くなった。後には莫大な保険金とかなえが残され、龍也は保険金目当ての親戚と裁判で戦い親権を得た。無用な争いを避けるため保険金は手放し、男手一つでかなえを育ててきた。中にはかなえ目当てに寄ってくる親戚も居た、今は全員海の底でお魚と戯れていることだろう。

龍也は回想をやめ玄関を出て鍵を閉め、階段を下りて集合団地を出る。昔は近くに住んでいた幼なじみと一緒に学校へ通っていたがいつからか一緒に通わなくなった。なので現在は1人で登校している。

「はあ〜また学校か、面倒臭いな〜」

龍也はぼやいた、本来ならば龍也は学園に通う必要はないが、とある理由で毎日登校することを義務づけられている。

「それは仕方のない事でしょう龍也さま」

「エルか」

龍也の後ろから綺麗な金髪を流した少女がやって来た。綺麗な金髪を腰元まで伸ばた碧眼の少女・・・私立宵闇学園の現生徒会長エルン・ラフイートがそこにいた。

「確かにあなたは学園に通う必要はないでしょうが統括理事長のあなたが登校しないのではお話になりませんもの」

これが龍也が毎日学園に登校しなくてはならない理由だ。私立宵闇学園は特異な能力を秘めている者や既に能力を発現している者を集めた能力者を管理するための学園だ。世間一般からは入試が超難関の進学校と言われている・・・実際は能力者であるか否かで入学が決まるのだが。龍也はそんな宵闇学園の理事長を務めている。

「毎回毎回思うんだが何で学生の振りをするんだ・・・正直、邪魔ではないんだが」

「安全の為よ、龍也さまは世界で5人しか居ない最高ランクの能力者・・・本当ならば護衛のSPも付けるべきなのに・・・」

「自分より弱い護衛を付ける意味もないだろう」

龍也はエルにそう返すと路地を曲がって行った。

「ちよつと！龍也さま何を・・・」

「エル、俺が学生をしているのも目立たないためなのだろう・・・なら生徒会長であるエルと一緒に登校するのはまずい」

龍也は正論を吐いてエルを黙らせ、そのまま路地を進んで行った。

「じゃあな、後で理事長室で会おう」

「ん？」

路地から出て別の通学路を歩いていると前方の十字路から美少女が歩いて来るのが見えた。それだけならば多々あることだが今回は違

う。別の十字路口からカツコイイ少年がパンを啜えて走って来るのが見えたからだ。その様子を見た龍也は面白そうに2人を眺める。

「きゃっ!」

「うわぁ!」

龍也の予想通りに前方の十字路口で美少女とカツコイイ少年がぶつかった。

「はは、大当たり!」

自身の予想が当たり嬉しそうに呟く龍也。そこへ少女が掛けていたメガネが飛んできた。

「っと、危ねえ」

龍也は口とは裏腹に危なげなくメガネをキャッチした。

「ふむ、・・・やっぱり届けないといけないか」

龍也は飛んできたメガネを届けるため少女と少年に近づいて行った。

「あわわわ、メガネメガネ!」

「す・すいません俺も一緒に探します!・・・メガネ!」

龍也が2人に近づいた時、2人はメガネを探している最中だった。

「ほらよ、メガネ」

龍也はメガネを探している少女にメガネを放り投げた。

「わわわぁ・・・っと・・・投げないで下さい!」

メガネ少女は上手にメガネをキャッチすると龍也に文句を言ってきた。

「良いですか!メガネには人の魂が籠もっているのです。ですから・・・」

「知らんよそんなこと」

メガネを投げられたことでメガネ教教主となった少女をよそに龍也は再び登校し始めた。

「・・・てえ〜・・・待つて〜・・・待つてく〜だ〜さ〜  
〜い〜」

龍也が学園に向かつて登校していると後ろからメガネ少女が追いかけて来た。

「ぜはあーぜはあー・・・ひどい・・・です・・・私を置いて行くなんて鬼ですかあなたは！」

「俺はお前と一緒に行くなんて約束してないぞ」

息を切らす少女をに龍也は飄々と言った。

「む〜〜、お前じゃないです。私の名前は・・・」

「はあ・・・お前うざいよ」

おまえ呼ばわりされたことがよほど腹に据えかねたのかメガネ少女は名前を名乗ろうとした。だが龍也がそれを遮る。

「ま！なんて人でしょ、人の事をうざいだなんて」

「はあ・・・仕方ない撒くか・・・顕現レベル2」

龍也は面倒になったのか一息で側にあった家の屋根に飛び乗るとそのまま屋根から屋根へ跳んで学園へ向かった。

「ああ！待つて・・・」

美優は何かを言いかけたが龍也は聞かずに学園まで駆けて行った。

2時間後、

「はあ、鬱だ」

龍也は理事長室の執務机で書類整理の仕事をしている。現在の時刻は午前9時半、健全な学生は勉学に勤しんでいる時間帯だろう。

「そもそも何で俺が・・・」

文句を言いながらも書類を捲る手は止めない。龍也の処理する案件は多い、違反行為をした教師の処分、今年の文化祭の出し物の承認、犯罪行為を犯した能力者の処分等々。

「あ~~~~~、もうやめ！ちよつと休憩」

「あら、それなら丁度良かった・・・新しい仕事よ龍也」

朝からやっていた書類仕事に一息入れようと席を立つた龍也の元へエルがやって来た。

「タイミングが良すぎないかエル・・・いや、エミリイか」

「正解、さあ行くわよ」

龍也はエミリイに引きずられながら泣く泣く理事長室を後にした。

~~~~~

人物紹介

・エルルン＝ラフィートー 龍也の付き人的なポジションにいる少女。腰まで伸ばした金髪に碧眼を持つ宵闇学園の生徒会長。二重人格でもう一つの人格がエミリイ、エミリイはエルが眠りについた時しか表に出られないエルとエミリイはそれぞれ瞳の色が違う。エルが碧色でエミリイが翠色。

・安藤 かなえー 龍也の妹であるが実妹ではない、宵闇学園に入学できたことから何かしらの特異能力を持っている。

・海藤 美優ー メガネをかけた天然少女、茶色がかった黒髪を腰辺りまで伸ばしている。性格はのんびりしていてどんな時もマイペース！がモットー、龍也にメガネを拾われた時に一目惚れをした。

~~~~~

















### 第3話 「はじめての異世界」

キーン〜コーン〜カーン〜コーン

昼休みのチャイムが鳴った頃、龍也は屋上で惰眠をむさぼっていた。あの後殺人を犯した特異能力者を捕まえたり、道が分からなくて困っているおばあちゃんを案内したりと忠実に職務を実行し学園に帰ってきた頃には10時頃になっていた。特にやることもないため、龍也は屋上で眠りにつき今に至る。

「ZZZZ・・・ZZ」

「くすつ・・・良く寝てる」

屋上で寝ている龍也に結が近づいて行った、結の手には凶器が握られている。

「これは昨日の・・・お返しよ!」

結は手に持った凶器もとい巻いた新聞紙を龍也の顔面に振り下ろした。

ぱしっ

龍也は顔面に直撃する寸前で新聞紙を受け止めた。

「・・・結・・・か、何の用だ」

「当然昨日のお礼をしに!」

龍也は結の顔ではなくあまり無い胸を見て言い放った。

「・・・お前胸ないのな」

「な・・・なな・・・死ねえ!」

結は自身のコンプレックスを突かれ激昂しながら先ほどに倍する速度で新聞紙を打ち下ろした。

「甘い!・・・そら」

「な!?!・・・痛あ!」

龍也は結から新聞紙を奪い取ると結の頭へ打ち下ろした。



「構わんよ・・・もし俺の秘密をバラすようだったら・・・死んでもらうから」

龍也は口調を変えずに言い放った。そのことが逆に結の恐怖をかき立てる。

「・・・わかったわ・・・絶対に喋らない・・・神に誓って」

結は龍也の瞳を見た瞬間、真剣に誓わざる終えなかった。なぜなら、龍也の目がその時だけどす黒く濁っていたから・・・。

「結はクリスチャンか？」

「いいえ、違うけど・・・」

龍也の脈絡のない問いに戸惑う結。

「ならば神に誓って・・・なんて言わない方が良さぞ。この世界に神なんて存在しないからな」

龍也は結に言っていたがその視線は空に向いていた。まるで空の更の上にいる何かに対して言っているかのように・・・。

「さて、結に幻想世界的能力について話した本当の理由を説明しよう」

龍也は空から結へ視線を戻した、そして幻想世界に秘められた能力について語り始めた。

「俺の幻想世界は感情を読む他に”同調”と呼ぶ力がある。同調は相手に幻想世界を流し込み精神レベルで同調して相手との意思疎通を可能にする技だ」

「つまりはテレパシーってことでしょ、それで？」

結は敢えて難しく説明する龍也にじれったくなり先を促した。

「・・・要約すると同調を使って結の頭の中へ直接、陰陽道について流し込むから後は自分でやれ！ってこと」

「随分とぞんざいね」

結は怒りを通り越してあきれの表情で龍也を見つめる。

「じゃあ早速やるぞ〜・・・同調！」

「ちょ・・・ちよつと待ってまだ・・・」

結の話の聞かずに頭へ手を乗せ同調を始める龍也。だが、シユパツ

同調を始めた途端に何か龍也の手を通り過ぎた、トサツ

手袋が落ちるような音を立て龍也の手首は切り落とされてしまった。

「・・・結、お前今”拒絶”したな？」

「ち・・・ちがつ・・・何！？、何なのこれえ！」

龍也は顕現で手を元に戻すと結を睨み付けた。同調は強力な力だ、戦闘に応用すれば相手の精神、魂のレベルから相手の心を分解し廃人にしてしまうことも出来る。だがリスクも大きい。先ほどの様に能力や強い意志によって反抗されるとその反動は龍也の肉体に帰って来る。

「どうやら結に同調は使えないようだ・・・面倒臭いが自分で教えるか」

「うん・・・ごめん」

結は龍也の手首を切ってしまったショックと自分が龍也を拒絶してしまったという後悔の念に苛まれていた。

「気にするな結、考えようによつてはラッキーだ」

「ラッキー？」

結は龍也の真意が分からず問い返した。

「ああ、なんせ・・・こんなに可愛い子と二人っきりで修行出来るんだから」

龍也は蠱惑する眼差しで結を見つめる。

「あつ・・・や・・・やだつもう〜そ・・・そんなに見ないで・・・  
・恥ずかしい」

結は龍也の眼差しを受けて心拍数を急上昇させていた。

「・・・可愛いよ結・・・食べちゃいたい位に・・・結」



「で？お前は何しに来たの」

「お前じゃないです、私の名前は美優です。海藤 美優」

龍也は先ほど殺されかけたためメガネ少女に対してぞんざいに接する。一方メガネ少女は龍也に名前を言っつて貰えないことが不満なのか名を名乗った。

「朝はメガネを拾って頂きありがとうございました」

美優はそう言つと丁寧に頭を下げた。頭を下げる美優の表情にはとある決意が見えた。

「ああ、そのことが。どう致しまして」

真摯な態度で頭を下げる美優に対して龍也も真面目に対応する。

「それで・・・ここからが本題ですが・・・安藤 龍也さん、私と私と付き合つて下さい！」

「「はあ!?!」」

そして龍也と結の声が綺麗に八モリ、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた・・・まるで3人の出会いを祝福するかのよう

昼休みが終わり人通りが無くなった廊下を龍也と結、美優の3人は歩いてきた。あの後龍也は美優の告白に対して

「少し考えたい3日後に答えを出す」と発言し3日後に白黒つけることになった。

「しかし、あなたもやっかいな人間を好きになつたわね」

「やっかいな人間つて龍也さんのことですか？」

結は昨日龍也の仮面の下を見たため龍也がどのような人間か理解している。そのため龍也に好意を抱くことはない

のだが事情を知らない美優は「何のこと？」とでも言いたそうな顔をしている。

「：知らないならいいわ。人間知らない方が幸せなこともあるし」  
「はあ、そうですね」

だが結はまだ龍也の本質を知らない、龍也の本質を結が知った時結は龍也に抱く気持ちの間逆になるのだが  
この時点での結はまだ知らない。

「どうしたんだい結そんな顔をしてはせっかくの美しい顔が台無しだよ。ほらもつと笑って…ね？」

そんな2人の気持ちを他所に龍也は優男風を装っている。

「ねえ、その口調気味が悪いからやめてよ」

「ええ、カツコいいじゃないですかあ。優しい龍也さんに優しく抱き止められる私…」

きゃっ~~~~~恥ずかしい!!」

「恥ずかしいのはあんたの妄想よ…」

優しい龍也と自分の未来を想像し、くねくねし出す美優とゲンナリしながら突っ込む結……実に対照的である。

「きゃあ!!」

「おっと!!」

結が美優に突っ込んで居た頃、先行していた龍也がT字廊下の角から走って来た少女とぶつかった。

龍也は即座に反応し少女を抱きとめる。

「大丈夫?怪我してない」

「あ……は、はい!大丈夫です」

「良かった、じゃあ俺はもう行くね」

龍也は少女の無事を確認すると微笑みを返して教室へ向かう。

「……はふう」

龍也に微笑みを返された少女は急ぎの目的も忘れ、龍也の去って行った方向を眺め続けたそうなの。

「・・・たらし」

「はあ、微笑んだ龍也さんも素敵です」

龍也は優男の表情で、結は何処か怒った表情で、美優はうっとりとした表情で、三人三様の表情を浮かべながら一行は教室を目指すのだった。

ガラッ

教室のドアを開けて龍也達は中に入った。

「あ、お兄ちゃん！入って来ちゃダメえ」

龍也が教室内に入ろうとして居るのを見てかなえが大声を上げ止める。

「?・・・かなえ、学校で大声を出すものでは・・・」

だがかなえの努力も空しく龍也は教室内に踏み込んでしまった。龍也が教室内に入った時、

バシユッ

何かが閉まる音がして龍也は振り向いた。

「これ・・・は!？」

龍也はこの時になってようやくかなえが何を言いたかったのか理解した。ドアが無いのだ、ドアだけではなく教室全体が異空間と化している。教室の壁は無くなり紫色の地平が広がり、天井も同様に紫色の空が広がっている。

「ね、ねえ龍也これって」

「あわわわ!？」

事ここに至りようやく結と美優も異変に気付いたようで動揺してい

る様子。

「……これは……紛れもない異空間……しかしどうやって一方龍也は冷静に周囲を見渡しこの空間が人為的に作られた異空間であることを察し、次に出口を探し始めた。

「無駄ですわ、龍也さま……もう既に私が出口を探しましたもの」先に教室に来ていたエルが龍也に言う。

「そうなのか……わかったそれでは人数確認を……ふむ、閉じ込められた人数は26人か」

龍也はエルに頷くと教室内に閉じ込められた人数を数えた。このような不測の事態が起こった場合まず必要なことが人数の把握だからだ。

「エル、この異空間はいつ……」

龍也がエルに更なる質問をしようとした時、

ガラッ

教室のドアが開き新たな来訪者の訪れを察知した。

「今度は誰……!?!」

龍也がドアの方を向くとそこには黒のコートに黒いガスマスクを付けた不審者がいた。

「おいおい、お前は誰……」

「貴様は!?!」

龍也が結に事情を聞こうとした時既に結はガスマスクへ向かって走り出していた。

「……………もう!何で厄介事ばかり……」

龍也は愚痴をこぼしながら結を追う。

「貴様様あ!……死ねえ!」

結が口汚くガスマスクを罵り蹴りを食らわせようと足を振り上げた。龍也はぎりぎりのタイミングで結を突き飛ばす。

「!?!……龍也何で!……」

結が言葉を発した瞬間さつきまで結が居た場所を何かが通り過ぎた。龍也は結を押さえながらガスマスクを睨む。

ふむ、コイツが結の仇か

龍也は幻想世界の能力を使い結からガスマスクの情報を得る。そしてガスマスクへと忠告する。

「おい、そこから動くな動くと殺す」

だがガスマスクは龍也の忠告を無視して結へ飛びかかった。

「仕方がないな・・・」

そして龍也もガスマスクを迎撃しようとして一歩を踏み出した時、世界が反転した。



































#### 第4話 「あきらめない」と

ピチャン

頬に落ちた雫の冷たさで龍也は意識を取り戻した。

「く・・・ここは、何処だ」

龍也は辺りを見回す、木、木、木、木、周りは木しかない。その様子はまるで、

「まるで森だな、皆は？」

龍也はこの場所が何処なのかを考えるより一緒に居た25人を探す。

まずは幻想世界を広げて・・・いた。1、2、3、4・・・10人か

幻想世界を広げて人の感情の波のみをすくい取り探知する。

「行くか・・・顕現レベル2」

龍也は早く皆を回収するため顕現のレベル2を発動し疾走、時速10?程度の速度を出し木々の間をかくぐりながら進んで行った。

どさっ

最後の10人目の名も知らぬ男を地面に置き、龍也はため息をついた。

「はぁ、面倒臭い」

龍也が拾った生徒は10人龍也を含めても11人、教室には26人

の生徒がいたため後15人を捜索しなければならない。

「手持ちのお札は20枚か」

龍也は10枚をハト型の式神に、残りの10枚をネズミ型の式神に変えて森へ放った。

「後は待つだけだな・・・」

龍也は周囲の木から2枚葉っぱを取り、取った葉っぱを使って護衛の為の式神を召喚する。

そうして待つこと数分、空から捜索していた式神の一体が複数の人間を感知した。龍也はすぐにネズミ型の式神を現場に送り込み場所の確認をし回収に向かう。そうして何度か感知と回収を繰り返して25人までは回収することが出来ただが美優だけがどこにもいない。周囲数十? 圏内にはいないか・・・もう少し捜索範囲を広げる必要があるな。

「うん・・・ここは」

龍也が美優を探しているとエルが起きてきた。

「おはようエル」

「おはようございます龍也さま。・・・ここは何処ですか」

エルは辺りを見回し教室ではないことを確認すると龍也へ問うた。

「わからん、ただここは日本ではない」

「ええ・・・地脈の流れも質も違います」

「そうだな・・・!? エルこの場所を守れ!」

龍也は式神から送られてきた情報を得た瞬間駆けた・・・南へ。

「ちょ・・・ちよつと!」

エルは突然の龍也の行動に驚くが言いつけ通りに周囲の警戒を強める。龍也は式神が見つけた美優の元へと駆ける。

龍也が美優を見つけたのは偶然だった、あれから式神の数を50に増やし周囲数十? 圏内を搜索し尽くし、これから搜索範囲を広げようと思っていた時、東西南北に一匹づつ派遣していた先遣式神のうち南へ遣っていた南方400? の地点で木に寄りかかっている美優を見つけた。だが龍也が美優を見つけた時、美優に狼が飛びかかるのを式神の目を通して見た瞬間龍也の中で何かが弾けた。

頼む! 間に合ってくれ

龍也は心の中で祈りながら影の世界を駆ける・・・美優の元へと。

### 【side 美優】

夢を、見ていた気がした。とても、とても大切な夢を・・・。

「ううん・・・ここはどこ」

私が眠りから目覚めて始めに目に入ったのは木の枝だった。

「何・・・」

私は周囲を見回した、周囲は木々で囲まれていて、なんだか森の中みたい。

「龍也さんは、龍也さんを探さない!」

その時私は動転していたのだと思う、だって真っ先に考えなくてはいけないのは龍也さんのことではなく私自身の身の安全を確保すること。でも私は龍也さんと離れるのが怖くて・・・またあの時みたいに捨てられるんじゃないかって・・・だから私はソレを見てしまった。

私は龍也さんを求めてさまよった、時間にして30分位は歩いて

いたんじゃないかな。そして私は森の向こうにレンガの破片が落ちて  
いるのを発見した。

「レンガ!?・・・レンガがあるってことは・・・人がいる！」

私は人工物を発見したことが嬉しくて、嬉しくて足を引きずりなが  
ら進んだ。

そうしてしばらく進むと人の怒鳴り声と肉を噛み千切るような音が  
聞こえた。

疲労と痛みによって頭が朦朧としていた私は森の向こう側へと駆け  
た、ただただ人に会いたい一心で・・・そして見てしまった。

「いやあ!いやあコツチに來ないで!」

「ゴハアアア」

私が森を抜けた先には1人の女の子がいた、私と同じようなセーラ  
ー服を着た女の子。

「よ・・・よかつ・・・」

私は女の子に声をかけようとした時、黒くて巨大な何かを通り過ぎ  
女の子の上半身を食いちぎって行った。

「え・・・な・・・に・・・これ」

私は力を失って崩れ落ちる女の子の半身を呆然と眺めているしか  
なかった。

「ひ!」

そうして我に返った私は周囲を見回して恐怖の悲鳴を上げた。私の  
周りには沢山の骨が積み重なっていたから・・・。

「あ・・・ああ・・・に・・・にげ」

恐怖に竦む私はとにかくその場から逃げることにしか頭に無かった。

恐怖で逆に冷静になった私は気力を振り絞って周囲を見回す。先ほ  
どの黒い影、巨大な狼?・・・二足歩行で上半身マツチョの狼は想  
像したくないナニかを咀嚼している。幸いこちらには気づいていな  
いようだ。

慎重に、気づかれたら終わりよ・・・あの子みたいに

私は一歩、また一歩とゆっくりと後ろへ下がって行く。だが女の子



狼が何かを吐いたと思ったたら突然私の体が吹き飛ばされ大木に叩き付けられた。

「ぐうああ・・・うう・・・痛い！」

既に限界を超えていた私の体はその一撃で動かなくなってしまう。

狼は私が動けないことを察したのかゆっくりと近づいて来る、私の体を影が包んでも尚、私はあきらめない。私は狼を睨み付ける、狼の目は怒りに染まり私を捉えている。

「く・・・来るなら来なさい。食えるもんなら食ってみろ！」

私は最後の瞬間まであきらめなかった、だって大切な人に・・・龍也さんの言葉だったから。

狼は私を食らうのではなく、その大きな巨体に見合った大きな爪を振り下ろしてきた。

「間に合ったか・・・よく頑張ったな美優」

狼の爪が私の命を奪おうとするその刹那、大切な人の声が聞こえた・・・。

【side out】

【side 狼】

その声が聞こえるのと同時に狼の巨体は吹き飛んだ。狼は地面に叩き付けられたことによって自身が吹き飛ばされたことを知覚した。

「ゲロウ！」

体勢を立て直した狼は獲物の方を見た、そこには人間のメスの他に見知らぬオスが立っていた。

「・・・間に合ったか、美優もう大丈夫だ安心しろ」

人間のオスは何事かをメスに呟き大木に寄りかからせると此方へ向かって歩いてきた。狼も男を睨み付ける、狼は主によって人間の言葉が理解できるようになったが人語を話す事はできない、そのため人間のオスを睨み付けることでそこにいるメスが自分の獲物だと主張する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

人間のオスは狼の主張を無視して無言でこちらへ歩いてくる、狼は即座に咆哮する。この咆哮は音を収束して音波にして放つものだと主から言われたが狼に理解することは出来なかった。ただ意思を持つて吼えれば何かが出ると理解はしていた。

「・・・・・・・・ぬるい」

男は目に見えないはずの音波砲を片手で弾く。

そして、

「すまないなお前に恨みはないが・・・・・・・・死んでくれ」

その声を聞くと同時に狼は意識が薄れていくのを感じた・・・・。

【side out】

龍也は狼の頭蓋から手を引き抜くと美優の元へ向かった。

「大丈夫か・・・待ってる今治癒の術をかけてやる」

龍也は手頃な石を美優の周りに並べて地脈の流れを捉える、そして捉えた地脈の力を美優に流し込む。無論大地を流れる地脈は強大すぎるため美優という器に入るだけだが。

「・・・・・・・・どうだ、まだ痛むか」

「あ・・・・・・・・りゅ・・・・・・・・りゅうやさん？」

痛みの余韻でボーっとする頭で美優は確認した。

「ああ、俺だ・・・もう大丈夫、悪い狼はやっつけたからな」

龍也の言葉を聞いた美優は涙を浮かべて龍也に抱きついた。

「う・・・・・・・・うわあああああああああつああああん」

「よしよし、良い子だ、良く頑張ったな美優」

龍也に縋り嗚咽する美優を龍也は優しく抱きしめ頭を撫でる。龍也はこの後も美優が泣き止むまで頭を撫で続けてなくさめ続けた。

この後龍也は泣き疲れて眠ってしまった美優を背負って皆のいる場所まで走る羽目になるのだがそれは別のお話……。

T o b e c o n n t i n u e d















































## 第5話 「黒衣の鬼」

「はあ、疲れた」

仕事を終え一休みしている龍也に点呼を取っていたエルが言い放った。

「龍也さま、まだお仕事が残っておりますわよ」

「マジか」

「マジです、お夕飯の獲物を捕まえて来て下さい」

龍也は愚痴をこぼしながら獲物を捕りに森へ入って行った。

龍也は顕現による強化を使い木々の枝や幹を足場にジグザグに進む、標的は頭に一本の角が生えたウサギ、略して一角ウサギだ。一角ウサギもまさか木々の上から襲われるとは思っていなかったのか1匹、2匹と順調に捕まえられていく。龍也は両手で持てる限界まで捕まえたところで皆のいる場所まで戻った。

「これで良いか」

龍也は両手の指に挟んだ8匹の一角ウサギをエルに渡した。

「はい、ご苦労様です。龍也さまはこの後いかが致しますか」

「ああ、気になることがあってなちよっと思つてくる」

そう言い残し龍也は影世界へ入り込んでいった。

「確か、この辺りだったか」

龍也は影世界で美優を助けた場所まで戻って来た。

あの狼は一体・・・

龍也は辺りを見回し一本のルートを選び出す。

「さて、まずはあっちの方から探索するか」

奇しくも龍也が選んだルートは美優が逃げてきたルートだった。

「……これは」

その場所に着いた時、龍也は言葉を失った。レンガで作られたゴミ捨て場らしきものの中に捨てられているのは大量の人骨、それも学生服を着ている事からまだ10代の少年少女。亡骸はぱつと見た感じ200以上はある。恐らくあの人狼はこの場所の番人だったのだろう。

「狂ってやがるな」

龍也はレンガ作りのゴミ捨て場だけでなく周囲の状況も確認する。

「ひとまず情報は得られた……帰るか」

最後に女の子の子と思わしき遺骸を埋葬しその他の骨も焼却してから龍也はこの場を後にした。

1日目夜、

他の皆が夕食を食べている時間帯に龍也は1人夜の星空を見上げていた。

「食事しなくても良い体って便利だけど……少し寂しいな」

龍也は手持ちぶさたそうに星空を眺めている。そんな龍也の元へ結がやって来た。

「ずいぶん暇そうね、ご飯食べないの」

「ああ、俺は顕現の能力によって食事も睡眠も必要無いからな、無理に食べても吐いちゃうし」

龍也の言葉に結はあきれた調子で問うた。

「あなた……本当に人間なの？」

「失礼な！……まだ人間だよ」

「まだ！？」

無意識的に龍也を探していた結、結が来てから楽しそうに笑う龍也。そんな2人の仲を裂くよう黒衣のガスマスクが出現した。だが結も龍也ですら気が付かない全身が黒いガスマスクは完全に闇に溶け込んでいたためだ。

ガスマスクは音もなく2人に近づいて行き、ついには背後まで忍び寄ったそして……結の悲鳴が夜の闇に響き渡った。

最初に異変に気が付いたのは龍也だった。

ん？……気のせいかな？

何か闇の中で息づく気配を感じて幻想世界による感知を行ったが周囲100mの範囲に生物は感じられない。

「……つや……ちよつと龍也、私の話聞いてる？」

「あ……ああ、すまないなんだか嫌な気配を感じてな、気のせい……」

龍也が言いかけた時、

ヒュッ

刃物が空気を切り裂く音を聞き反射的に結を突き飛ばす。

「きゃ！」  
突然のことに結が悲鳴を上げる、だが龍也に結を構っている余裕はなかった。

「……手前えは！」

結のいた場所にナイフを突き立てていたのは教室で見たガスマスクだった。全身を黒衣で覆っていたため夜の闇に溶け込み反応が遅れた。と龍也は分析した……しかし、

いや！違う、そうじゃねえ！俺はさっき幻想世界による感情探知を使ったんだぞ！なのにコイツは

幻想世界による感情探知の範囲は1?、探知を使つてから間もなく襲つてきたためガスマスクは間違ひなく探知範囲内にいたはずである。

「ちい! 顕現レベル3つ」

ガスマスクは龍也と結を見て結の方へ歩みを進めた。それを見た龍也はガスマスクと結の間に入った。

コイツは探知範囲内にいたはずなのに探知出来なかった・・・考えられる可能性は3つか

1つ目はガスマスクの正体が人形か死体で操つてゐる奴は別にいる場合、俺の幻想探知は感情を察知するため感情のない無機物までは探知不可能だから・・・

「なあ、お前は何で結を狙う?」

龍也はガスマスクの真意を探るため対話を試みる。

2つ目はガスマスクの能力が空間移動の能力で俺達の後ろに突然現れた場合

「・・・」

ガスマスクは龍也の問いには答えずじつと機会をうかがっている。

3つ目は何かしらの能力のよつて幻想探知を遮っている場合か・・・まずいなもし仮に2つ目の空間移動だった場合結をこの場から逃がすことすら出来ない! せめてあと1つ奴の能力の根幹に迫れる材料があれば!

龍也は異世界に来て初めて焦りを感じていた。

俺とガスマスクの技量は同等・・・しかし相対してわかつたがコイツには存在感つてもものが感じられない、まるで空気と相対しているかのような異常!

加えて昼間に狼と闘つたこともあり龍也の顕現使用可能回数も残り2回。そのため龍也は攻めあぐねていた

どうにかこの現状を打開しないと・・・待てよ、・・・よし!

龍也は今の現状を打開するため再び幻想探知を使った。龍也を中心

に幻想世界が広がっていき、ガスマスクを範囲内に収めた。

「よし！……結、皆の居るところまで走れ！」

龍也は幻想世界の探知を使い、ガスマスクの感情が読めないことを確認すると結に逃げるように命令した

「！？……わかった！」

結も即座に龍也の思惑を察して走り出した。結に反応してガスマスクが追いつがるが、

「おっと！お前の相手は俺だ」

即座に龍也が牽制する。龍也は幻想世界によってガスマスクの感情が読めないことを確認し、ガスマスクの能力が空間移動系の能力では無いことを確認し、結を走らせたのだった。しかし龍也はある一つの可能性を見落としていた。すなわち、ガスマスクが幻想世界を遮る術を持ちなおかつ空間移動の能力を有している可能性を。

龍也がその可能性に気が付いた時既にガスマスクは龍也の視界から消えていた。

「しま！？……結！」

龍也が消えたガスマスクを追いかけ始めた頃、結も走っていた。

「はあはあ……仇が目の前にいるのに……仇を取れないなんて！」

結は息を切らせながら全力で走る、龍也が結を逃がした意味を結は理解していたがため。

「はあはあ……っ！」

嫌な予感に従い身を伏せた結の真上を大きなナイフが通り過ぎた。ナイフは結の後ろの木に刺さり動きを止める。

「……うそ……よね？」

思わず結は思わず呟いた、結の視線の先には黒衣のガスマスクの男。結は反射的に大型のナイフを引き抜き構える……しかし、ガスマ

スクの手にも新たなナイフが握られていた。

「だから・・・何だつて！・・・言うの・・・よ！」

結はナイフを振りかぶりガスマスクと剣戟を繰り広げる・・・しかし、最初の一合で決着はついてしまった。

上から振り下ろした結の一撃をガスマスクは横から薙ぐ一撃によって弾き飛ばす。

「あう」

ナイフ同士がぶつかった衝撃で結は地面にへたり込んでしまう。その隙を見逃さずガスマスクはナイフを振り下ろす。だが、ナイフが結の命を奪う事は無かった。

ガキーン

金属同士がぶつかる冷たい音が響き龍也の蹴りがガスマスクのナイフを弾き飛ばす。

「はあ！」

龍也はナイフを蹴った勢いそのままガスマスクを蹴り込む。龍也の蹴りを腕で防ぐガスマスク、蹴り自体は防いだものの勢いは殺しきれず吹き飛ばすガスマスク。

「逃がさん！」

そのまま闇に紛れ込まないように龍也は追撃する。空中で何度も交錯する龍也とガスマスク、龍也は自身の手足で、ガスマスクはどこから取り出したナイフでそれぞれ応戦する。

龍也が現在使用しているレベルは6、さっきは相手を侮っていたためまんまと隙を突かれてしまった。そのため龍也も本気を出し全力でガスマスクと闘う。龍也が完璧に制御出来るレベルの最高が6であるから、実質全力と言って差し支えないだろう。しかし先ほどの4倍の速度の攻撃をガスマスクは空気のような存在感によって防ぐ。龍也は速度と威力で、ガスマスクは隠密性でそれぞれ相手を圧倒しているため両者の実力は真に拮抗していた。だが龍也の蹴りがガスマスクに直撃したことによって均衡は崩れた。

「よし……これで！」

龍也は両手に氣を集める、そして右手の氣と左手の氣を掛け合わせることによって氣を爆発的に増大させる。

「喰らえ、氣術・氣竜砲」

そして爆発的に高まった氣を収束させて放つ、収束された氣はまるでビームのように木々をなぎ倒しガスマスクへ迫る。

そして氣竜がガスマスクの胸を貫きそのまま爆散させた。

爆散したガスマスクから氣竜を伝って龍也の中へ何かが入り込んだ。龍也は入り込んだ何かの正体を知った瞬間ガスマスクの正体を理解した。

「……そういう……ことか」

龍也はそう呟くと結を抱き起こして、皆の元へ帰っていく、龍也達が帰った後にはただ折られた木々が残るだけだった。





























































## 第6話 「千手」

2日目朝、

龍也はこの日朝から重労働を強いられていた。

「まったく、エルの奴め人の事を便利屋扱いしやがって・・・」

龍也が現在行っているのは安全に寝泊まりする場所の確保、昨晩はこの森に落ちたばかりで食料の確保や飲み水の調達を重点的に行っていたため安全な場所まで確保するに至らなかった。そのため現在龍也が地術を使い安全な場所を作っているのだ。

「まずは・・・地術を使って土を盛り上げて・・・生土・鋼盤断壁」  
龍也が術を使うと地響きを立てながら大地が隆起し50m程の崖が出現した。

「次は地術を使って穴を空けて」

龍也が崖に手をかざすと20m程の部分に丸い穴が空いた。

「最後に地術を使って穴を横に広げて、階段を付けておしまいっ」と  
龍也は崖に階段を付けると一休みした。

「ふむふむ、これで簡易ホテルが完成つとあゝ疲れたあ」

「お疲れ様です龍也さま」

龍也が肩を叩いていると龍也の影からエルが出てきた。

「そうか、それでどうだった」

「はい、龍也さまのおしゃった通りに東に800?程行った辺りに村がありました」

龍也は昨日美優を捜すために東西南北に分けて式神を飛ばした。美優を見つけた後も飛ばし続け氣の持つ限り探知させていた。

「やっぱりな、北のと西のやつは氣が尽きて墜落してしまっただけど

東のやつだけは墜落する瞬間に何か見えた気がしたんだよ」

「それでいかが致しますか、龍也さま」

答えは分かりきっていたがエルは敢えて聞いた。

「当然、向かうに決まってるでしょ・・・うん800?か」

「飛行タイプの式神で10時間つてところかな」

「龍也さま全力で飛ばせば5時間で着きますわ」

龍也の言葉に異議を申し立てるエル。

「・・・お前は俺を殺す気か?」

「滅相も御座いませんこれは龍也さまへの信頼の証です・・・さ

あ善は急げということだ早速」

エルは龍也の襟首を掴むと引きずりながら歩いて行く。

「痛い、痛い、痛いってちょ・・・自分で、自分で歩けるからあああ

ああああああああああああああ

朝露濡れる早朝の森に龍也の絶叫が木霊した・・・。

5時間後、

現在龍也達は飛行型の式神を使って優雅に空の旅を満喫していた・・・龍也以外。

飛行型式神を中心として全方位に16体探査及び魔よけの能力を持った小型式神を配置し動物や小型の魔物の接近を防ぐ。そして仮に大型の魔物が近づいて来ても感知出来なくなった式神の位置から敵が来る方角もわかる二段構えになっている。

「エ・・・エルちゃん流石にこの速度を維持しつつ探知の式神まで管理するのはきついんだけど」

現在龍也達は時速120?程のスピードを出している、エルの言いは却下されたがそれでも尚速い。

「頑張つて下さいましね龍也さま、私たちは優雅にお空の旅をしなから応援しておりますわ」

加えてエル達が風圧で振り落とされないように木術を使い風の幕で式神を覆い、高い高度を飛んでいるため炎術で温度調整をしている。そのためエル達は快適だが龍也は地獄という何とも奇妙な構図になっている。

「ぐうう流石に4つの作業を同時にこなすのは無理……ん？」  
龍也の顔つきが真剣になったためエルが心配そうに言う。

「龍也さま……本当に無理でしたら……」

「いや、前方20？付近を先行させていた式神が破られた」  
そう言う龍也の額からは一筋の血が流れ出している。

式神は術者の血を媒体にするため、式神を潰されると術者である龍也自身に跳ね返ってくる。

「……敵ですか」  
「このままの速度だと10分程でぶつかるな……いったん止めるぞ」

龍也は敵を迎撃するため速度をゆるめ遂には止める。風の幕も解除し迎撃態勢を整える。

「エル式神の制御を代われ」

「この大きさでしたら20分程度しか保ちませんわ」

エルは龍也と違い氣の量が一般人と同レベルのため50m強の大きさの式神を維持するだけで精一杯になつてしまう。

「20保てば御の字だ」

15分後、

「やっと来たか、エルまだ保つか」

「つつ……後……5分ほどなら……なんとか……  
つつつ！」

龍也は余裕の表情でエルは震えながらそれぞれ前を見据える。する

と前方に5つの影が見えた。

「……………ワイバーンか……………ふむ」

龍也は目に氣を込め視力を強化し前方を睨み付ける。

「少し揺れるかもしれない……………踏ん張れよエル」

「か弱い……………女性に……………踏ん張るだなんて……………言わないで！」

龍也はエルに一声かけると即座にワイバーンを殲滅するため術を發動する。

「秘術・千手」

龍也のかけ声を皮切りに前方に掲げた巨大な腕が現出した。その腕はまるで巨人の腕をそのまま切り取ったような大きさだった。

「いつけええええ！」

龍也は方向し両手を振るった、すると光の腕は粒子をまき散らしながら伸びワイバーン達を強襲した。

前方から高速で迫る巨腕に3匹のワイバーンが光の腕に飲み込まれ墜落する。2匹は光の腕を躲したが光の腕から生えた無数の腕に掴まれ握りつぶされた。戦闘開始から僅か5秒で5匹のワイバーンは全滅した。

「さて、それでは行くか」

龍也は再び風の障壁を展開すると再び100?以上の速度を出して疾走し始めた。

「はあはあ……………龍也……………さまは、げほつ……………疲れて……………」

「はあはあはあはあ……………ふう……………龍也さま大丈夫ですか？」

「ん……………何が」

エルは実際に巨大式神を20分維持するだけで精一杯だったため、既に何時間も維持している龍也の大変さが身にしみて理解出来た。

「いえ、この式神は維持するだけでも莫大な氣を消費しますのでお体の方は……………」

「ああ、そういうことか」

氣は生物の生命エネルギーであるため、使えば使う程体力を消耗する。

「さつきまでは確かにきつかったけど20分休んだら治った」

「に・・20分で!?・・・・・龍也さまあなたは人間ですか?」  
そんなやりとりをしながら一行は一路村を目指した。

「ん・・・エル少しの間制御を頼む!」

そう言つて龍也は式神の上から飛び降りた。

「へ?・・・ちょ・・うがあ!?!」

龍也は強制的にエルと式神を結びつけると、そのまま降下する。

「飛行符」

龍也は足の靴を媒体に飛行符を発動してそのまま空中を駆け下りる。

「よ!、ほっ!、っと!、とっつ!」  
しゅたっ

と綺麗な着地を決めた龍也は周囲を見回した。そこはお花の海だった、見渡す限り一面に花畑が広がり赤や青、緑、黄など様々な種類の花が咲き乱れていた。

龍也は視線を前に戻す、龍也の視線の先には花摘みをしている少女がいる。

「ハ・・ハロウ」

龍也はぎこちない英語で少女へ話し掛けた。

「?・・・・・つつつ!」

龍也の呼びかけで龍也に気づいた少女はあたふたしながら姿勢を正して言った。

「」

「・・・・・はい?」

こうして龍也は、はじめての異世界人と出会った。





































































## 第7話 「カスール村」

「……ほあい？……もう一回言ってくれない」

龍也の言葉に少女は首を傾げてもう一度言った。

「……、……？」

「うえ！？……あ〜と……何語？」

龍也は頭を抱えて蹲りたい衝動に駆られながらも少女との「コミュニケーション」を取ろうとする。

「……、……？」

しかし、龍也よりも早く少女が何かを言ってきた。

「え……あ〜うん、そうそう」

龍也は極限まで緊張した龍也はとりあえず頷いておいた。

龍也が頷くのを見た少女は何かの言葉を呟いた。

「……これで通じますか？」

「あ……うん、通じる通じる……何これ魔法？」

龍也は冗談交じりに言ったのだが、

「はい、魔法です」

龍也の問いに笑顔で答えた少女をを見て何も言えなくなった。

「その頃のエル達」

「りゅ、りゅ、りゅ、龍也さま〜お願いだから戻ってきて〜  
〜お……おちる〜」

「ちょ……頑張りなさいよあなた！どんどん高度下がって……  
ひい！い……今ガタンって……い……いいやあああああ

ああああつあああつあ  
」

一方龍也はエル達がどんどん近づいて来ていることに気づかず  
いた。

「え〜と魔法？」

「はい、魔法です！・・・あつでも渡り人さんには魔法って言  
われても分からないですよね」

「い・・・いやあ流石に魔法とは・・・にわかには信じがたいな」

龍也も魔法は知っているが魔法に出会ったことは無かった。

「なあ、いきなり不躰なお願いだが・・・魔法とやらを見せてく  
れないか？」

「良いですよ・・・では！この者との意思を通じさせたまえ・・・  
テレパシー！・・・」

「・・・おい、何も起こらないぞ」

「あれ？・・・おかしいですね」

龍也はテレパシーの意味を脳内で考えながら1つの答えに行き着い  
た。

「なあ」

「何ですか？」

龍也の言葉に首を傾げていた少女が聞き返す。

「テレパシーってもしかして翻訳魔法？」

「そうですね、それが何か・・・」

「既にかかつてんじやん！」

龍也の言葉の意味を考えようやく少女も理解出来た。

「そうですね！もう既に掛かってますよ」

「・・・そうか、では・・・」

他の魔法を見せてくれ。と言いかけた時、

「いいやあああつあああああああああああああああつああ  
あ龍也さま〜〜〜た〜〜す〜〜け〜〜て〜〜」

高速回転しながら式神が地平の彼方へと消えていった。その光景を

見た龍也は、

「・・・他の魔法を見せてくれ」

何も見なかったことにして再び問いかけた。

「きゅ~~~~~」

「はあ、まったく余計な仕事を増やしてくれるな」

その後結局顕現のレベル6を使い助ける羽目になった。現在エル達は龍也の後ろで気絶している。

「まったく、貴重な顕現の回数を無駄に空費してしまった」

龍也は気を取り直して少女に言う。

「さて、それでは他の魔法を見せてくれないか」

「・・・つき・・・せん」

「何？」

「だ・か・ら・私は翻訳魔法しか使えないんです、他の魔法は一切使えないんです」

胸を張って自慢げに言う少女。

「・・・それって威張るようなことか？」

龍也の突っ込みは空しくお花畑へと消えていった。

「そう言えばまだ自己紹介していませんでしたね、私の名前はミリイです」

「ああ、俺は龍也 安藤だ」

龍也とミリイは現在村への道を歩いている。

「……あの、ところでそんなことして大丈夫ですか」

ミリイは龍也の手に握られた紐を指差した、紐は龍也の右手から続きエルの右足を結んで続き結の太ももを結んで……25人全員を紐でくくって引つ張っている。その際にスカートが捲れ中身が見えているのはご愛敬。

「気にするな、人の留守中に勝手に操縦して勝手に気絶するような奴らだから」

龍也の言い分はどこかずれているが本人は気づかない。

「それより、良かったのかこんな大人数で村に押しかけてしまって」

「はい、それは全然問題ありません……皆逃げ出して労力が不足していたところですから」

ミリイは最後の方は聞き取り辛くして言った。

「何か言ったか？」

ミリイの思惑通り、龍也は最後の方の言葉は聞き取れなかった。

「いいえ、それより早く村に行きましょう……多分村の皆も歓迎してくれるはずです」

またもミリイの声は誰にも聞かれることなく消えていった。

「これはこれは皆様遠路はるばるよくお越し下さいました、私村長をやっておりますラクシーダと申します」

「はぁ……どうも」

龍也達は問題なく村に入れた、しかし村に入った途端に村長の家に連行された龍也。

「さて、龍也どのには早速お仕事をして貰いましょう……まずは……とりあえず家畜の世話からお願いします」

「うゝえ？・・・マジでか」

「はい、マジで御座います、いやあゝゝゝ丁度人手が足りなくて困っていたところですよ」

はっはっはと笑いながら仕事を押しつける村長。

「で・・・でも俺皆を家に運ばなきゃ」

「では全員運び終わつた後をお願いします・・・では私はこれで  
そう言つて村長は家を出て行つてしまった。

「・・・マジかよ」

後には龍也だけが残り龍也の言葉は誰に聞かれる事もなく消えていった。

結局仕事を押しつけられた龍也は全員を家に押し込んだ後、農具を担いで村はずれにある農場へ向かつていた。

しかし、この村少し妙だな・・・

龍也達に貸し与えられた家は全部で12棟、龍也とエルは村長の家で寝泊まりするとして2人で一軒の家を貸し与えられたことになる。

少し待遇が良すぎる・・・それに建っている家の数と村人の数が合わない

数人程度ならば誤差の範囲内だろう、しかし数十人規模で人数が違うのだ、現在村に建っている家の数は334棟、しかし龍也が見たところ村人全体の数は200人程度、これは明らかに異常事態だ。家族がいる者なら家族と同じ家で暮らす。従つて実際に使われている家は多くても100軒以は越えないだろう。そうすると村の3分の2が空き屋ということになる。

村人の異常な少なさと言いミリイの独り言と言い、何かがこの村で起こっていることは確か

龍也は調べてみるかと一人ごちた、龍也のつぶやきは誰にも聞こえ

ることなく村の大地に染み渡っていく

龍也が仕事を終えた頃辺りは赤く染まり始めていた。

「……………そろそろ、帰るか」

龍也はそう言つたと農具を仕舞い帰り支度を整えた。

龍也が村長の家の近くまで帰つて来るとミリイと村長の怒鳴り声が聞こえた。

「だめです！それだけは絶対っ！……………これは私の役目ですから」

「何故だ！何故わからない……………お前は私にもう一度我が子を失えと言つのか？」

「だからって……………だからって村以外の人間を犠牲にしようだなんて……………そんなの間違つています！」

「だが私にはもうお前しか！……………お前しか……………残っていないだ……………マリエルは……………もう」

「！？……………だから……………よ、マリイ姉さんは私の為に……………だから今度こそ私が！」

「……………駄目だ！」

「お父さん！？」

「……………5年だ、アイツが現れてからもう5年間も経つんだぞ、何故我々だけがここまで苦しめられなければならない？……………この痛みは他の人間も味わうべきだ……………例えば今日村に来た旅人達とかな」

「お父さん……………なんてことを……………なんてことを考えるの……………そう……………わかった私の本当のお父さんはあの時に居なくなつちやつたんだね！」

「待ちなさい！待ってくれミリエル！？」  
バンッ

と勢いよく扉を開け放ちミリイは出て行った。

「……………ミリイ」

「……………随分と大変なことになっているようだね、村長」

呆然と娘の後ろ姿を眺める村長に声をかけた龍也は果たして救いの神か破滅の悪魔か……………。

「や……………やあ、龍也くん……………仕事はもう終わったのかい？」

「……………ああ、一応終わらせたよ、まだ、残っているがね」

まだ、の部分を強調して言い放つ龍也。

「そ……………そうか……………」

「…………………………」

気まずい沈黙が2人の間を包む。村長は龍也が何処まで聞いていたのか判断できずに、龍也は……………。

「……………そういうことか」

先に言葉を発したのは龍也。

「ドラゴンに……………生け贄……………ね」

龍也は幻想世界で得た断片的な情報で相手を揺さぶる。

「な！？何故それを！……………いや、先ほどの話を聞いていたからだな……………それなら……………」

「この話をバラす前に死んで貰う……………か？」

龍也は相手の考えを先読みし、正確に相手に伝えることによって相手の動揺を誘う。単純だが実に有効な手段を使って村長の心を揺さぶった。

……………ここまで揺さぶれば同調しても拒絶されることはある

まい

龍也は自身の思い通りに村長が混乱していることを確認した後、同調を使った。

「……ぐすつ……ひくつ……うう……ぐすつ」

村を一望できる小高い丘の上にミリイは居た。村の方に背を向けてすすり泣いている。

「こんなところにいたのか」

「ぐすつ……龍也……さんですか？」

「はい、龍也さんですよ……何で泣いているんだ」

龍也の問いに言葉を詰まらせるミリイ。ここで下手に答えると墓穴を掘りかねないからだ。

「な……んてな……全部知ってるよ……親父さんのことも、

お姉さんのことも……ミリイのことも」

「そう……ですか……全部」

それつきり石像のように喋らなくなる龍也とミリイ。

「酷い話ですよね、ある日突然ドラゴンがやって来て、半年に1回生け贄を捧げなければならなくなって……それから村人が減っていつて……姉が……生け贄に……されてえ……ぐすつ」

「ミリイ、我慢する必要はない泣きたいときには泣けばいい」

「つつつ!……ううう……うわああああああああん」

龍也の言葉がきつかけとなったのかミリイは堰を切ったように泣き

出した。

「よしよし・・・良い子良い子、大丈夫だ俺がついてるから」

龍也は泣いているミリィを抱き寄せ頭を撫でる、いつまでもいつまでもミリィが泣き止むまで・・・。

ひとしきり泣いてすっかりしたのかミリィは泣き止み、今は2人で沈み行く夕日を眺めている。

「・・・なあ、ミリィ・・・」

「私は逃げませんよ、龍也さん」

龍也の言わんとすることを察知して釘を刺す。そして更に言葉を紡ぐ。

「私は・・・私は逃げません・・・例えこの命が今夜限りのものであったとしても・・・私は」

「そうか・・・強いなミリィは」

龍也はもとより説得するつもりは無かった、芯の通った主張がどれほど強いかわっているから。

「強くなんて・・・そろそろ夕ご飯の支度をしなくてはいけませんのでこれで失礼しますね」

「ああ」

ミリィはそう言うとき家の方へ向かって歩いて行った。思いなしかその足取りは前より力強くなっていた。

辺りはすっかり暗くなつてしまった。私は今、生け贄の祭壇に立って居る。祭壇といつても村の中央にある広場に段を作っただけの質素なものだ。

恐怖はある、でも私は逃げない、この身を賭してドラゴンから村を守る……それが私の使命！……なんてカツコイイことを言っているが実際はただの罪滅ぼし。

私の姉マリイ姉さんは半年前に生け贄となつて死んだ。それも私の代わりとなつて死んだのだ。本当なら半年前の生け贄には私になるはずだった。でも私には死ぬ前にどうしてもどうしてもやりたいことがあった。私だつて立派な乙女だ、好きな人の1人や2人いるでも、私が好きになつた人は姉さんの恋人だった。でもどうしてもどうしてもあきらめきれずに姉さんと姉さんの恋人に頼み込んで前日にデートをさせて貰えることになつた。ただこの時の私は知らなかつたのだと思う、人の欲望に限りがないことを。

その日は楽しかった、姉さんの恋人のリユートさんと1日中遊んで、お出かけして……リユートさんと一緒にいられるだけで幸せだった。そして、その日の夜私はリユートさんに告白してしまつた。……結果は惨敗、私は泣きながら1人村へと帰つた。泣きながら歩いていたので、それとも雨の中を歩いていたからなのか私は足を踏み外して崖下に転落してしまつた。

そして目覚めた時には、全てが手遅れだった。姉さんは代わりとして生け贄に、生け贄が違うつてだけの理由で数十人の村人が焼き殺さりユートさんも行方不明に……。だから……。だから私は罪を償うために今夜ここで死ななければいけない。

私は回想をやめて目を開く、そこには既にドラゴンがいた。

2階建ての家を超える大きさ、黒い鱗、赤黒い目……俗に黒竜と呼ばれている種類のドラゴンだ。黒竜は竜種の中でも特にどう猛

で人や他の魔獣を襲う。

黒竜は私を食べるために大きな口を開けた……………私は恐怖で目を閉じたその時、

「お前の気持ちにはわかったよミリィ……………だが敢えて言わせて貰おう、死ぬな！」

【side out】



























































## 第8話 「絶対強者」

ドラゴン、それは全ての魔獣の頂点に位置し世界の絶対強者として君臨する怪物だ。その力は単体で国を脅かす程、国が総力を挙げ討伐隊を編成し、ようやく討伐し得る。頭も良く人とのコミュニケーションも取ることができ、渡り人と同じく特異能力を持っている。それらの要素がすべてドラゴンを絶対強者たらしめている。もし、仮にドラゴンを単体で討伐するような人間がいたらそれは最早世界の理から逸脱していると言えよう・・・何、もし私の前にそんな輩が来たらどうするか？ははは、そんなの逃げるに決まっている。

ドラゴン研究の第一人者エドワード・  
アドガー博士へのインタビューより

「お前の気持ちはわかった、だが敢えて言おう・・・死ぬな」

「りゅ・・・龍也さん！？どうしてここに！」

ミリイは不測の事態に動揺する、それもそのはず、村人は全員村から離れた山奥に避難しているのだ。勿論龍也達も例外ではない。

「どうして、どうして龍也さんがここに!？」

「お前を助けに来たんだ・・・さつきそう言ったる」

ミリイは自分の所為で他の人が傷つくことを極端に嫌がる。

「私はそんなこと頼んでいません!・・・だからどうか」

グルウウウオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ここに来て、今まで静観していたドラゴンが咆哮する。ドラゴンの咆哮は衝撃波をともなって周囲のものを吹き飛ばす。

その時のドラゴンは怒っているようにも、悲しんでいるようにも、笑っているようにも見えた。

「時間が無い・・・か・・・とりあえずミリイを助けて、話はそれからだな・・・顕現レベル10」

龍也は最高レベルであるレベル10を発動した。

「出し惜しみはしない、最初から全力でいく」

「エミリイ、ミリイを連れて遠くへ避難しろ」

「了解致しました龍也さま」

エミリイは影世界を使いミリイを引き込むとそのまま安全地帯まで避難する。

龍也はそれを見届けると、跳んだ。跳んで村から離脱する。ドラゴンは飛び上がり龍也を追う。

そしてバトルフィールドとなる荒野に到着した。

「・・・・・・・・行くぞ」

「・・・・・・・・グウウ」

2匹の獣は最早ミリイのことなど頭の片隅にすらない、2匹の頭の中にあるのは目の前の敵を引き裂き殺すことだけ・・・・・・・・・・  
・こうして2匹の絶対強者は激突した。

先手は龍也、音速の2倍程の速度で疾走しドラゴンの胸へ蹴りを食らわせる。鋼鉄でできた鉄の塔すらブチ折るその一撃は、ドラゴンの翼によって防がれた。

ガギィ

金属同士がぶつかり合う音を立て龍也の蹴りとドラゴンの翼は衝突する。衝突によって周囲に衝撃波が広がる。

防がれた！？・・・まずい！

龍也は即座に身を翻すが、ドラゴンの方が一呼吸速かった。

ドラゴンの反撃は爪による一撃、鋼鉄すら容易く切り裂くその爪は当たれば絶命必死。いかに顕現で強化している龍也でも直撃だけはなんとしてでも避けなければならない。

ブウォン

ドラゴンの爪が龍也に向かって振り下ろされた、だがその爪が龍也を切り裂くことはなかった。龍也は空中で回転してドラゴンの腕に着地、腕を足場にして跳躍ドラゴンとの距離を取る。ここまでの攻防がおよそ1秒、常人ならば反応すら出来ない速度で両者は闘い続ける。

「ならば！土生・土壁」

龍也は地術を使ってドラゴンの足場を陥没させ体勢を崩させる。

生土、生木、生金、生水、生火、

龍也の意識に答え、土と木がドラゴンの足を飲み込み、鉄の剣が尻尾を刺し、水が顔を覆い、火が体を包む・・・だが、

グラーアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ドラゴンは全身から魔力の波動を放出し攻撃を打ち消した。

生半可な攻撃は効かないか……影世界

龍也は次なる攻撃を繰り出す、龍也が自身の影に入って直ぐにドラゴンの右足の影が揺らぎドラゴンの右足が影に沈み込む。突然右足が影に飲み込まれたことによってドラゴンは体勢を崩す。そしてドラゴンの右足が完全に飲み込まれた時を見計らって龍也が飛び出てきた。

「影世界解除！」

龍也が叫んだ瞬間、

ブツ、

何かが閉じる音がしてドラゴンの右足は根本から千切れた。

ゴオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

右足を失った痛みで咆哮するドラゴン。その背中を龍也が駆け上る。

そして頭を蹴り空中に飛び出しドラゴンの口の中に石を投げ入れる。

「爆符！」

そして爆発、爆発によってドラゴンの歯を2、3本吹き飛ばす。

「はは、当たり！」

はしゃぐ龍也に向かってドラゴンがブレスを放つ。

ゴハアツアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

「やば、水克火！」

龍也は咄嗟に水克火によって空気中の水分を凝縮し盾とする、しかし龍也の取った手は悪手だった。

ドラゴンのブレスは空気中の水分だけで防ぎきれるものではなく水分の盾を突き破り龍也を飲み込んでいった。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ドラゴンブレスは大地を削りながら直進していく。

「づうううつつだら！」

龍也は渾身の力を振り絞ってブレスから抜け出す。

「カハツツ顕現レベル10！」

ブレスによって半身が消し飛んだ龍也は即座に顕現を使いダメージ

をリセットする。しかし、それは決定的な隙、ドラゴンがこの隙を見逃す筈もなく、

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド、

ドラゴンは上空へ飛び上がり、龍也に向けて炎弾を放ってきた。その数は軽く20を越える。

「こんなもの！」

龍也は両手両足を使い炎弾を弾いていく、

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド、

「ぐううく・・・そお」

炎弾の嵐は段々と激しさを増していき、遂には辺り一面を炎の海に変える。

「グルウアアアア」

ドラゴンは嬉しそうに一鳴きすると地面へと近づいていった。

「甘めえ！」

ドラゴンがある程度近づいた時、炎の海から龍也が飛び出してきた。いかなる原理か音速の4倍程の速度でドラゴンの腹へ突っ込む。

ゴバアアアアアアアア

ドラゴンは一番柔らかい腹に強力な一撃を喰らったため飛行能力を失い落下する。

ドズウウウン

龍也が着地するのとドラゴンが墜落するのはほぼ同時だった。

「グウウウウウウゴバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

ドラゴンはすぐさま体勢を立て直しドラゴンブレスを吐いた。

「秘術・千手！」

それに対して龍也は千手で対抗する、龍也の千手とドラゴンのブレスが激突し白と赤の光を散らす。

「く、千手が押されるなんて・・・なんて出力だよ！」

龍也は千手を使ってブレスを空にそらす。

ゴオオオオオオオオオオオ

逸らされたブレスが空を切り裂く、それを尻目に龍也は再びドラゴ



ドラゴンが激突した岩山は崩れ、土埃が立ち込めていたが「散符」

龍也の術で土埃を晴らす、だが、そこにドラゴンは居なかった…

！？………何処に……

龍也は即座に幻想世界を広げた。幻想世界によって地中も含め1？圈内にドラゴンが居ないことを知覚した時、ドラゴンは現れた、龍也の真下から…

真下からの衝撃で上空へ吹き飛ばされる龍也。

な…ぜ？

かすれる意識の中で龍也は何故ドラゴンが真下から現れたのか考えていた。幻想世界で地中の中にもドラゴンは居ないことを確認した直後にドラゴンが出現した…考えられる可能性は一つだけ。

特異…能力か…！？

龍也がその可能性に気付いた時、既にドラゴンは龍也に迫っていた、そのドラゴンは紛れもなく先ほどのドラゴン…ただ体の色が土色なことを除けば。

「顕現！レベル10」

龍也は最後の力を振り絞って顕現を使い肉体のダメージを戻す。龍也が顕現をするのと同様だった、土色ドラゴンの尻尾が龍也に叩きつけられた。

ドガアアアアアン

尻尾によって叩き付けられた龍也は地面へ激突した。

…意識が…保てない！？

顕現のリセット機能は肉体的なダメージをリセットするもので精神的なモノに属する意識は回復出来ないため、龍也の意識は回復しきれていなかった。そして、意識が混濁した龍也を大きな手が掴んだ。「か…はあ！」

ドラゴンは右足、右目を失い表面を覆っていた強靱な鱗も剥がれた

り傷ついたりしている。それでも右腕に込められた力は龍也を殺すのに十分な力を誇っていた。

このままでは死ぬか…仕方がない…裏秘術・呪いの理

「ぐうう…これ…以上…俺を攻撃すればお前は死ぬ!!」  
龍也は言霊に呪いを込めてドラゴンを呪う。

「ゴハアアア」

呪いにかかったことを知らずにドラゴンは尚も龍也に攻撃する。そして、

ブシュツ

呪いの力によって龍也を掴んでいた右腕が千切れた、

「グウラアアアアアアアア」

ドラゴンは右足に続き右腕まで失い地面に倒れ伏す。

「顕現レベル10」

龍也は顕現の力を発動してダメージを回復し、大きく距離を取った。

「我は望む、汝の力を…」

龍也は言霊を紡ぐ、最強の奥の手を発動するために。

「我が相する者は汝の敵なり…」

「故に我は汝の力を借り受ける…裏秘術・神降ろし」

龍也は同調を広げシンクロする…世界と。

言霊を紡ぎ終わった龍也は体に力が満ち満ちているのを感じた。裏秘術・神降ろしは神を降ろす訳では無い、幻想世界の同調を使い土地を流れる地脈そのものと同調し世界の力の一部である地脈の力を龍也の力に上乘せする術。

上乘せされた力により龍也は音もなくドラゴンの前まで移動する。

「グウ?ゴハアアア」

ドラゴンは龍也に気付きブレスを放って来たが龍也は片手でそれを防ぐ。

「グウウゴアオ」

ドラゴンは勝てないと思ったのか特異能力で地面へと潜る。

「無駄なことを・・・」

龍也は地面へと手を当て地面と同化したドラゴンを次元を引き裂き引っ張り出す。

「グググ、ゴア！」

ドラゴンも負けじと尻尾を叩き付けてきた。

「生木・斬風」

龍也は風を極限まで圧縮した刃で尻尾を切り落とす。

「生木・斬風乱式」

極限まで圧縮された風の刃が幾つも放たれドラゴンをバラバラにする。

ドスっドス、ドズウン

ブロック状に切られたドラゴンが地面に落ち、村の命運を賭けた死闘は呆気ない程容易く終わった。



























































## 人物紹介 ミリィ編+その他

### 人物紹介

・ミリィー本名はミリエル、青髪で少しウェーブしたロングヘア。柔らかな顔立ちのためオツトリとした雰囲気。

生まれも育ちもカスール村。生まれつき魔力が高く一時期、街の高名な魔法使いラグドールの元で魔法を習っていた。しかし長い詠唱呪文を覚えることが出来ず覚えられた魔法は一番簡単な通訳魔法のみ。年齢は14歳。半年前まで2歳年上の姉マリエルがいた。

ミリィの人物紹介だけでは文字数足りないため、今までの敵についても紹介しておきます。（軽いネタバレ有り）

・黒衣のガスマスクー2年前結と結の兄を襲い結の兄を殺した犯人。しかし空間移動が出来る等ただの殺人犯では無く何か秘密がある。5話で龍也と闘っている。

・ワーウルフー黒いローブの実験体、元はただの狼であったが黒いローブに捕獲され改造された。美優曰く筋肉マッチョな狼、能力は音波を収束させて放つことが出来る。

・ブラックドラゴンー元々はドラゴンでは無かったが、黒いローブの持つ魔導書”魂の射出”によって存在を変質されドラゴンにされた。渡り人と同じく特異能力”カラーワールド”を持っている。カラーワールドは体の色を変えて、変えた色と同じ物質と同化するこ

とが出来る能力。

## 第9話 「挑戦状」

ドスっドス、ドズウン

「終わったようね」

龍也がドラゴンを細切れにするのと同時に龍也の影からエミリイが現れた。エミリイの腕にはミリイが抱えられている。

「……………神・降ろし使った……から後……頼む」

龍也は最後の力を振り絞ってエミリイに言うと気を失い倒れた。

「龍也さん！？大丈夫ですか！死んじゃダメです死んだら……」

龍也が死んだと思ったミリイは龍也へと駆け寄って行く。

「ZZZZZ」

「……………寝てる？」

「はあ、あなた少し落ち着きなさい」

慌てふためくミリイをエミリイがなだめる。

「神降ろしは地脈の莫大なエネルギーをその身に降ろすため、肉体と精神に多大な負荷がかかるのよ」

エミリイの説明に首を傾げるミリイ。

「はあ、つまり龍也さまはこのまま丸1日は寝たまま起きないの、エミリイのかみ砕いた説明でようやく理解するミリイ。」

「わかって貰えて何よりだね、私は龍也さまを家に運ぶからあなたは村の皆にドラゴンが死んだことを伝えて来て貰えるかしら」

「はい、わかりました」

元気な返事をして駆けて行こうとする、だがエミリイがそれを止めた。

「ちょっとお待ちなさい……………これでよし、これを持っていきなさい」

エミリイはドラゴンの遺骸から牙を一本抜き取りミリイへ渡した。

「これは？」

「念のためよ、村の皆があなたの言うことを信じなかったらそれを見せあげなさい」

「はい」

ミリィは軽く頷くと村の皆の元へ走って行った。

同時刻、

エミリィとミリィの様子を遙か上空から眺める影があった。

「まさかまさか、ドラゴンですら倒してしまうとは驚きです」

黒い影の正体は全身を覆う黒いローブ。

「しかし今度落とした渡り人は質が良い」

黒ローブはエミリィや結、美優を眺めながら呟く。

「でも一番そられるのはドラゴンを倒した少年でしょうか……」

・まさかワーウルフのみならずブラックドラゴンすら倒すとは、何とも素晴らしい！」

黒ローブは一際大きく揺らぐとその場からかき消える。後に不気味な笑いを残して……。

2日目夜、

「うん……エル今は何時だ」

寝癖で頭をぼさぼさにした龍也は威厳のない声でエミリィへ問う。

「今はあれから丸1日経っておりませわ、龍也さま」

「そうか、俺が寝ている間に何か変わったことは無かったか」

龍也はあれから丸1日経っている現状を把握するためエミリィに聞く。

「はい、龍也さま大至急お伝えしたいがございます」  
エルは昏間ミリイから話されたことを話した……。

「……ここが異世界か……すまないがもつと詳しく教えてくれ」

「はい、了解しました」

エルは龍也のために詳しく説明する。

「ここデイクトリアは地球とは別次元に存在する異世界、デイクトリアには魔術ではなく魔法が普及している。デイクトリアには数十年に数人規模で渡り人……異世界人が落ちてくる。デイクトリアに落ちた異世界人は例外なく強大な魔力を持ち、魔法を習得すれば万の兵と同等の働きをする……以上です」

エルはミリイから聞かされたことを要点をまとめて龍也へ伝える。

「ふむ、ミリイは今までに数十人規模で渡り人が落ちてきたことはあると言っていたか？」

「……いえ、渡り人は数十年に一度数人規模で落ちてくる、としか」

エルはミリイから聞かされた時を思い出しながら答える。

「……デイクトリアに落ちてくるとは？」

「はい、デイクトリアへ来る渡り人は皆、直前に黒い穴に落ちてデイクトリアへ来るらしいのです」

エルは眉間に皺を寄せながら言う、その表情の意味を理解した龍也は窓の外を見ながら言った。

「ふむ、俺達と渡り人は落ちてくる直前の状況が違うね……つまり」

「はい、私達は落ちた、のではなく落とされた、と表現する方が正しいかと」

エルが言い終わると同時に窓の外を見ていた龍也の目が鋭くなる。

「……エル何か投げるモノはないか？」

エルは龍也の言葉の真意が読めずに首を傾げながら置いてあった小物を渡す。

龍也はエルから小物を受け取るとガラスの無い窓から外へ投げた。

「……さて、エル頼みたいことがある。ミリイと結、それと美優をここへ連れてきてくれ」

エルは龍也の言いつけ通りにミリイ達を呼びに行つた。

「……逃げなよ？」

エルが去つた後、龍也は再び窓の外を睨み付けながら言い放つた。

【side ???】

私は今日丸1日使い落とした渡り人を観察した、実験の成果を確認するために。今回の実験には良質な生け贄を6人も使いましたがからねえ。くくく、目立たずに生け贄を集めるのにどれだけ苦労したか……ドラゴンを使つてコツコツと。

今回の実験では総勢26人も渡り人をディクトリアへ落とすことに成功しました。素晴らしい成果だ！……途中、実験の為に隔離した1人が連れ戻されたり、実験体であるワーウルフやドラゴンが殺されたりしたがそれもあまり問題ではない。代わりなどいくらでも作れるのだから私の欠片”魂の射出”によって。

私はこれからの実験三昧の日々を想像する………凄くいい！

「まさしく最高のきぶ……つつつ！」

その時、私目がけて何かが高速で飛んできた。

私は右手で何かを受け止める。

「くくく、これはこれは……」

私目がけて飛んできたものは木彫りの置物……感づかれた？  
私は前方10？の地点にある一つの家を見た、家の中ベッドにいる  
少年は真っ直ぐこちらを睨んでいる。

「くくくく、……面白い！丁度退屈していたところだ。  
貴男の挑戦状、確かに受け取りましたよ」

黒ローブは木彫りの人形を懐にしまつと音もなくその場から消え去  
った。

【side out】

「連れて参りましたわ龍也さま」

龍也の前にはミリィ、結、美優が並んでいる。

「ありがとうエル……さて、早速本題に入ろう。俺はあと数日で  
この村から出て行くつもりだ」

龍也の言葉に美優はうなずき、結は真っ直ぐ龍也を見つめ、ミリィ  
は声を荒げて異議を申し立てた。

「どついつことですか龍也さん！村を出て行くなんて……」

「言葉通りの意味だ、元々俺はこの村に用があつた訳じゃないし……  
・ここが異世界ならもつと世界を見て回りたい」

龍也の言葉にミリィは言葉を失った。

「それでなミリィには俺に翻訳魔法を教えて欲しい」

「………わかりました」

龍也の言葉にミリィは頷いた、龍也はミリィが頷いたのを見ると今  
度は結と美優に問うた。

「よし、お前達はどうする？俺と来るか」

龍也の言葉に結と美優は同時に頷いた。

「当たり前よ！………まだ陰陽道について教わって  
ないもの」

「当たり前です！………まだお返事

貰ってませんから」

龍也は綺麗にハモった二人に苦笑しながら頷いた。

「よし、ありがとう3人とも……少し疲れたな、もう一度寝ることにするよ。おやすみ皆」

そう言い残して龍也は眠りについた。エル達は龍也が眠りにつくとそれぞれの部屋へと帰って行った。

こうして村に来て2日目の夜は更けていった。

































































## 第10話 「異世界デイクトリア」

異世界デイクトリア、それがこの世界の名前。異世界デイクトリアには数十年に一度他の世界から異世界人が落ちてくる、落ちてきた異世界人のことを渡り人と呼ぶ。渡り人は皆膨大な魔力を有している。この世界に魔術はなく魔法が普及している、魔法は通常魔法と魔陣術に分けられる。

この世界にはギルドがあり魔獣が生息している。

この世界の国について、この世界の国は大まかに5つに分けられる。世界で最も広大な国土を持つダンガルシア帝国、唯一の民主制国家メリナス共和国、善王が治めるエンシエルト王国、亜人の国ノーザンローム、商業の国アーキナイ。

この世界で確認されている限り大陸は1つ、その大陸上半分にダンガルシア帝国、左下にメリナス共和国、右下にエンシエルト王国、メリナスとダンガルシアの国境付近の山脈にノーザンローム、そしてメリナスとエンシエルトの国境下の海域に島国であり商国でもあるアーキナイがそれぞれ存在している。

村から2？程離れた草原で龍也、結、美優、エルはミリイからこの世界について説明を受けていた。

「この世界について何か質問はありますか？」

「少し良いか」

ミリイの言葉を受けて龍也が手を挙げた。

「魔法、国についてはわかったが魔獣とギルドとは何だ？」

「はい、魔獣とはこの世界に存在する”魔素”と呼ばれるものによ

つて変質した存在の総称です」

ミリイの説明にエルが手を挙げて質問する。

「魔素とは」

「魔素はですね、魔力の中に含まれているものです。通常人間は魔力を呼吸と共に体内へ取り入れます、その過程で必ずいらぬ部分が出てきてしまう訳です。魔力のいらぬ部分のことを魔素と呼びます」

龍也はミリイの説明を聞いて魔力と魔素の関係がある物質に似ていることに気が付いた。

なるほどなつまりは酸素と二酸化炭素のような関係か……

・ん？

「なあ、ミリイその魔素は空気中に放出されるんだよな」

「はい、そうですね体内に魔素が溜まると魔獣になってしまいますから」

龍也はミリイの説明を聞き疑問に思ったことを聞いた。

「魔素の処理はどうしているんだ？つまり魔法を使えば使う程魔素が溜まっていくなら何処かで魔素を浄化して魔力に変換しなくてはならないだろ」

そう、魔力を使えば魔素が溜まる、ならば何処かで魔素を魔力に変換しなくては魔素が溜まる一方なのだ。

「え〜とそれは……わかりません」

ミリイは申し訳なさそうに恐縮し言った。

「この魔素の理論にしても解明されたのは最近の事なんです……ですから詳しいことはわかっていないんです」

「なるほど……ありがとう、そろそろお昼だから説明会もお開きにしようか」

龍也は皆にそう言った後結に声をかけた。

「結、お前は残ってくれ。この後、陰陽術の修行をする」

龍也はそう言うと修行の準備をし始めた……

ミリイから説明を受けていた場所よりさらに先、広大な草原の中心に龍也と結の姿はあった。

「さて、ここら辺まで来ればよいだろう。修行を始めるぞ」

「ねえ、何でここまで移動したの」

結は龍也がわざわざ移動したことに疑問を抱いた。

「他の奴に氣の使い方を知られたら厄介だからな、それですは説明からだな」

この後ミリイとの修行が控えている龍也は結に説明し始めた。

「まず俺が扱う魔術は陰陽道と呼ぶ、陰陽道の術のことを陰陽術、陰陽道を扱う人を陰陽師とそれぞれ呼称する」

龍也は結に自身が扱う事になる魔術の説明をする、魔術を扱う上で名前は重要なものだからだ。

「そうだ……結これから人に名前を名乗る時真名を名乗るな」「真名……って何？」

結は龍也が口にした真名について問いかけた。

「魔術的に言う真名とはその人の魂の名前、結の場合だと歳掛 結……が真名に当たる。魔術師にとって名前と言うものは大変重要なもの、魔術師に自分の真名が知られた場合……自分の心臓を掴まれていると思え」

龍也の言葉に身震いをする結。

「……わかった、以後気を付ける」

「よろしい、それでは陰陽道の説明に入る」

結の返事に満足した龍也は陰陽道についての説明をする。

「俺の扱う陰陽道の流派は高見ヶ麻呂流陰陽道と呼ばれる流派だ。高見ヶ麻呂流陰陽道は式神、符術、氣術、生克術、秘術からなる。」

これら全ての術は氣を使つて発現する」

「氣つて龍也が異界で見せてくれたやつよね？」

結は前に見た氣の劍を思い浮かべる。

「そう、陰陽術の元となるエネルギーは氣、つまり氣の扱いを知らないと陰陽術は使えない。そのため結にはこれから氣を扱えるようになつて貰う」

龍也は言い終わると結の額に手を置いた。

「・・・少し熱くなるが我慢しろよ」

龍也はそう言つと結に自分の氣を流し始めた。

### 【side 結】

「・・・少し熱くなるが我慢しろよ」

龍也のその言葉を聞いた瞬間、私は体が段々熱くなっていくのを感じた。

あ・・・熱！私の体の中を何かが駆け巡る、この体の中を駆け巡っている何かが氣・・・なのね。

で・・・でもこの熱さにも慣れて・・・

「結、よく頑張つたなこれで最後だ」

龍也はそう言つと更に私の中に氣を流し込んで来た。体力に氣を流し込まれたことによつて私の意識は遠のいていった・・・。

### 【side out】

「・・・氣絶したか」

龍也は力を失い倒れる結を抱き留めた。

「すまんな結、本来なら気は何ヶ月もかけてゆっくりと感じ取れるようになるものなんだ」

今回龍也が用いた方法は至極単純、自身の氣を送り込み循環させて結自身の氣を暴走させた。

「だが時間がない……どうやらこの世界は安全ではないようだからな」

龍也は結をお姫様抱っこして村へ向かって歩き始める。結を抱える龍也の頭の中にあるのは昨日見つけた黒ローブ。黒ローブが放っていた異様な気配を思い出しながら龍也は村へ帰って行った。

コンコン

龍也が部屋で精神統一している時、部屋のドアが叩かれた。

「……開いてるぞ」

「失礼します、龍也さんお約束通り魔法を教えに来ました」

扉ドアを開けて入って来たのはミリイ、ミリイは部屋に入るとイスを引いて座った。

「それでは始めましょう龍也さん」

「まあ、待てもうすぐ結と美優も来るから、2人が来たら始めよう」  
龍也がそう言った直ぐ後に結と美優が入って来た。

「遅れてごめん」

「間に合いました」

「結、美優お前達はベッドに腰掛ける……よし、始めてくれミリイ」

龍也は結と美優をベッドに座らせ、自身は壁に寄りかかった。それによりベッドに結と美優、ベッドと相對するようにミリイ、そしてその3人を眺めるように龍也が壁に寄りかかっている構図となった。

「はい・・・まずは魔法についての説明からですね」

「ミリイは皆の準備が整うと魔法について説明し始めた。」

「魔法には2種類あります。通常魔法と魔陣術です、通常魔法は魔力を込めて呪文を唱えることで発動する術で通常魔法と呼んだらコッチの方ですね。対して魔陣は魔力を用いて魔陣と呼ばれる魔陣によって魔法の術式を物に描くことが出来ます、描かれた魔陣に魔力を込めれば誰でも描かれた魔法を使えます」

「・・・ふむ、それは便利。つまり剣に炎の魔陣を描けば炎が出る剣になる訳だ」

龍也は例え話を交えてミリイの説明をわかりやすく解説する。

「はい、ただ魔陣はその利便性から誰でも学べる訳では無く、所属する国に専用の届け出を出す必要があります」

「ミリイの言葉に頷いたのは龍也だけだった。当のミリイでさえ何故そうするのか理解出来ていないようだ」

「・・・あのなあ、魔陣をうまく使えばただの紙を爆弾に変える事だって出来るんだぞ、想像しろ突然役所に送られてきた紙が爆発したら大惨事になるぞ」

龍也の言葉を聞いてようやく頷く3人、龍也はそれを見て少し肩を落とした。

「・・・つ・・・続けますね、なので私が教えられるのは通常魔法の方になります」

「ミリイはそう言っ腕を幕って皆に見せながら説明する。」

「いいですか、魔法を使うときは体の何処かにある”魔力紋”と呼ばれる部分が重要になってきます」

「ミリイの言葉を聞いた龍也はピクンツと眉を動かした。」

「魔力紋は必ず体の何処かにある魔力を吸収する場所です。体内に収めてある魔力が減ったらこの魔力紋が空気中に存在する魔力を吸収します。従って魔力紋の吸収スピードが消費魔力を上回れば理論上は永久に魔法を使い続けられる訳です・・・そんな人間いません」

けど」

ミリイの言葉を聞いてビクツと龍也の肩が震えた。

その後も横道に逸れながらミリイの魔法講義は続いていった……。

ここは影世界、白黒で上下が逆転した世界に龍也は一人ポツンと立っていた。

「ふむ、魔力紋か……ここまで酷似しているとはな、正直驚きだ」  
龍也は魔法の説明に思うところがあった。

「まさか魔法にも紋があったとは……」  
龍也は氣を主に武器として使うからこそ分かる、氣と魔力の性質はほぼ同じなのだ。魔力に魔力紋があるのに対して氣にも氣紋と呼ばれるものがある。実は龍也が陰陽師として世界最強を誇っている最大の要因がこの氣紋にある。

「まず魔力紋は……右手か」  
龍也の氣紋は左手にあるため、奇しくも左手が氣、右手が魔力という構図になった。

「さて、それでは……始めるか！」  
龍也はそう言うのと自身の内なる魔力を探し始めた。

「……見つけた、これが魔力か」  
龍也は自身の内に魔力が潜んでいるのを見つけた。

「まずは魔力を全部まとめて外に放出するつと」  
龍也は体の外に小指大の魔力球を作り出し維持する。

「……後は魔力が回復するまで待つ」  
龍也がこれから行おうとしていることは龍也にしか出来ない修行法。まず始めに自身の内に存在する魔力を全てまとめる、次にまとめた

魔力を外に放出、維持し続ける。魔力が回復したら同様にまとめて外に放出、先に放出していた魔力と合体させる。これをひたすらに何時間も繰り返す。

「・・・こんなものか」

影世界で一週間放出& a m p ;まとめる作業を行った龍也の真上には直径2.5?程の巨大な魔力球が出来上がっていた。

「後はこれを・・・取り込むだけだ」

龍也はそう言うのと巨大魔力球を体の内に取り込み始めた。

「が・・・ぐぐぐ・・・ぐううおお」

龍也が取り込む魔力はあつという間に龍也の最大魔力量を跳び越える。それでも尚龍也は魔力球を吸収し続ける。

「ぐぶ・・・ぐうう・・・」

限界を超えて魔力を取り込む龍也は遂に口から血を吐いた。だがそれでも龍也は魔力を取り込むことをやめない。

龍也がこんなことをしているのには理由がある。

龍也は人に比べて氣の量も魔力の量も極端に少ない。龍也の魔力量は常人の二十分の一程度、そのままだと下級魔法一発で魔力が底をついてしまうのだ。

そこで龍也は考えた、すなわち常人より器が小さいのならば器自体を広げてしまえば良いと。狂気にも似たその発想は見事龍也の氣の量を人外のレベルまで引き上げることに成功した・・・痛みを代償として。

ブジュツ

肉が裂ける嫌な音が響き龍也の右腕が千切れる。

「かはっ・・・けん・・・げん・・・」

龍也は肉体が機能を維持できなくなると顕現を使って戻し、再度魔力吸収を続ける。血をまき散らしながらも着実に魔力を吸収し続けるその姿は痛ましかった。

空が完全に闇に包まれた頃龍也は現実世界へと帰還した。着ている衣服は破れ血にまみれていたがそれを纏う龍也自身は生気に満ちあふれていた。

「成功だ・・・これで！」

龍也は影世界で無謀とも言える修行を無事に修め、限界を超えた魔力と吸収する過程で裂けて広がり吸収量が増えた魔力紋を手に入れた。

この時、人外の氣と魔力を持った魔神が誕生した。

この後龍也は家への帰り道、美優と出会い卒倒させてしまうことになるのだがそれは別のお話・・・。





























































## 第10話 「異世界ディクトリア」 (後書き)

今回の初めての異世界を見直してみたのですが、何か新規さんにはわかりにくい仕様になってますね・・・

取り敢えず第1章はあと数話で終わりなのでこのまま終わらせてしまい、第1章が終わり次第脚注を入れたり、紹介話入れたりしますので少しの間は読みづらいでしょうがご了承下さい。

第11話 「美優の想い」(前書き)

## 第11話 「美優の想い」

夜、

龍也と美優は一緒に歩いていた。

「もう〜本当にビックリしたんですからね」

「悪い悪い・・・でもあれは傑作だったな」

あの後龍也が修行を終えいざ帰宅しようと思っていたところに美優が通りがかった。美優は龍也の姿を見るなり悲鳴を上げて倒れたのだ。さらに介抱していた龍也の顔を見るなり再び悲鳴を上げると言う失態を繰り広げて今に至る。

「もう！笑い事じゃないですよ、本当に何をしていたんですか」

美優は龍也の姿を痛々しそうに見ていた。

「ん、少し修行をな・・・美優少し歩こうか」

龍也は真っ直ぐ家へは帰らずに横道に逸れる。

「あう、ちよつと待って〜」

美優も置いて行かれまいと龍也を追いかける。

龍也が美優を連れて来た場所はミリィがふさぎ込んでいたあの丘陵だった。

「わあ、こんな素敵な場所があったんですね」

龍也と美優は小高い丘の上からカスールの村を眺めている。綺麗に澄んだ星空の元、所々灯籠やたいまつのみかりに灯されているカスールの村は幻想的な雰囲気醸し出している。

「思えば、美優に告白されてからまだ4日しか経ってないんだよな」  
龍也はしみじみと呟く、だが言葉とは裏腹に哀愁の念は感じられない。

「・・・なあ美優、今日この場で告白の返事を返そうと思う」

龍也のその言葉に一気に緊張する美優。

「はい・・・分かりました！」

美優は決意を固め龍也を見た、美優の瞳は揺るがず真っ直ぐだった。  
美優の強い意志を秘めた瞳を見た龍也は美優に問うた。

「なあ、何故そこまで俺を好きになれる？」

「・・・龍也さんはこの言葉に覚えはありませんか？」

龍也の問いに美優は少し考え、ある言葉を言った。

「・・・いいか、逃げても良い、怖くても良い、ただあきらめるな、あきらめたらそこで終わりだ。いいか、恐怖に吞まれるな恐怖を呑み込め・・・どうですか？」

美優の問いに唸りながら頭を捻る龍也。

「いや、記憶に無いな。誰の言葉だ？」

「ふふ、やっぱり覚えていなかったんですね」

美優は少し淋しそうに笑った後、龍也に向き直り言った。

「この言葉はですね、10年前私を救ってくれた命の恩人・・・龍也さんあなたから言われた言葉です」

美優が言った直後、美優の強い想いに幻想世界が反応し龍也の頭の中に当時の記憶が流れ込む

く・・・これ・・・は、誕生会・・・楽しい・・・団欒・・・破

碎音・・・強盗・・・両親の死・・・迫るナイフ・・・

「10年前私の誕生日の日、家に強盗が押し入りました。最初は父が、次に母、そして兄・・・最後に私に近づき強盗は・・・」

美優は当時の光景を思い出しているのか、微かに震えながらそれでも尚言葉を紡ぐ。

「その時助けてくれたのが龍也さんでした、だからメガネを拾って頂いた時は本当に驚きました・・・だって10年前の姿そのままだ

「だから」

龍也は静かに美優の話聞き、目を閉じた。その様子は何かを考えられているように、葛藤しているように見えた。そして数秒の後目を開けると美優を真っ直ぐ見据えて言った。

「美優は強いな……美優、これからその強さで俺を支えてくれるか？」

龍也は優しく美優に言う、美優はその言葉を聞くとうれし涙を流しながら龍也に抱きついた。

龍也は美優を受け止め、その背中を優しく撫で続けた。夜のカスール村を背後に抱き合う2人はとても、とても美しかった。

## 【side 観山】

龍也と美優が出会う数時間前、

村から数百m離れた林の中に6人の男達が集まっていた。

「な……なあやっぱりやるのかよ観山」

6人の内1人、おどおどしている青年が観山と呼ばれた男に問うた。「当たり前だ、犬飼てめえは俺の言う通りにしていればいいんだよ！」

その男を一言で言い表すなら”不良”これに限る。

くすんだ金髪、ギラついた目、首にはドクロのついたアクセサリをかけた男、観山は5人の仲間に言い放った。

「良いか、俺は必ず安藤の野郎を追い出してやる……その後は俺達のやりたい放題だ！」

観山の言葉に一人の男が発言した。

「……………だが安藤は正真証明の化け物だぞ。観山も見ただろ  
う村の隅に積まれた黒いバケモノを」

龍也が単身でブラックドラゴンを倒した事は周知の事実になっていた。そのため観山の言うことが難しいことは誰の目から見ても明らかだった。

「……………」

男の言葉に黙り込む観山、実際観山も内心は半ばあきらめていた。先ほどの言葉はいつの間にかリーダーのポジションに収まっていた龍也に対する反抗心からのものだった。だが、

「なるほどなるほど……それならば私に良い考えがございますよ  
お」

それは闇だった、いつの間にか観山達の中に黒いローブが紛れいていた。

「な……なんだてめえは！」

観山は恐怖を押し込めて黒ローブへと問う。だが黒ローブは観山の問いには答えずに質問を返す。

「私はリュウヤ アンドウに対抗することの出来る者ですよ」

黒ローブはそう言うと言いつつ手から炎を出した。炎は瞬く間に大きくなり5m程の大きさになった。

「何を!？」

「ご覧なさい、これが私の力です」

動揺する観山達をよそに黒ローブは手の炎を近くの森に投げつけた。投げられた炎は一瞬で巨大化し炎のドラゴンとなり森を、大地を焼き尽くす。

「……………嘘……だろ」

それは誰の声であったのか、黒ローブは一瞬にして森を消し去った。「ご覧の通り、私もドラゴン程度ならば一瞬で八つ裂きにすることが出来ます……私に強力してくれるならあなた達に力を与えて上げましょう」

トドメと言わんばかりに黒ローブは観山達へ言う。その口調はまる

で悪魔のようだった・・・。



























































## 第11話 「美優の想い」(後書き)

新規投稿しました、この6日間はとにかく大変でした。小説を書く  
こうと思っても書けなくて、なんて言うかプチスランプみたいな・  
・。恐らくは第1章は今日中に投稿出来ると思います。第一章を投  
稿し終えたら一週間程度更新をストップして小説の勉強をし直して  
から書き続けようと思っております。

PS .

作者名変えました、気分を入れ替え新しい気持ちで書くためです。

## 第12話 「漆黒の闇を纏う者」

はじめての異世界 第12話 「漆黒の闇を纏う者」

翌日朝、

この日、龍也と結は朝早くから修行をしていた。

「さて、結修行を始めようか」

龍也は結に修行の開始を告げる。

「まず結には氣の完璧なコントロールを覚えて貰う」

そう言つて龍也は自身の氣を放出し様々な形に変える。劍から始まり盾、槍、三角形、円形、ひし形、長方形等々。

「凄い」

「とりあえず結には劍と槍の形に氣を形態変化して貰う。実践で使える強度、仕様で劍と槍を10秒以内に形成出来れば合格だ」

龍也から伝えられた修行内容を聞いた結は実際に氣を練り始める。

「むむむ………」

結は言われた通りに氣を操作しようとする、だが結の氣は動く素振りも見せなかった。

「………ぶはあ！……これ、無理じゃない？」

結は難度の高さに思わずそんな言葉を吐いた。

「はあ、良いか結。氣の操作に必要なことは氣の動きを正確に把握すること。氣というものは血液と同じで常に体内を高速で循環している。ならば、どうする？」

龍也の助言を受けた結は自身の氣の流れを読み、止めにかかる。

「そうだ、氣が循環していて読みにくいのであれば止めてしまえば良い」

結は目を閉じて体の中の氣を感じ取っている。

「……出来た！」

結はそう言つと目を開けた。

「龍也これで良い？」

「そうだな・・・まあ、良いだろう。後は氣を変形させるだけだが・・・ああ、一気にやろうとするな。ゆっくりだ、少しずつ変形させて慣れてきたら一気に・・・そうそう」

龍也は娘に勉強を教える父親のように手取り足取り教えていく。その様子はまるで本当の親子のようであった。

「うん、そうだ・・・もう一人でも良いな、俺は向こうで修行してくるから何かあつたら呼びに来い」

龍也はそう言つと数百m離れた岩石地帯の方へ歩いていった。

同時刻某所、

【side 犬飼】

あの集会から俺達は変わった。黒ローブに与えられた力に俺達は全員気分が高揚していた。

「はははは、凄え！凄えぞこの力」

「・・・確かに、これなら安藤を！」

観山達ははしゃいでいる。それもそうだろう、10mを越える岩山を一瞬にして塵に出来たら誰でもこうなるか。

観山が黒ローブから貰った力”省略”は確か”過程を省略する力”だったかな。何でも自分が出来る範囲内の事象の過程を省略し結果のみを具現化する力・・・とか黒ローブは言っていたが難しいこととは分らん。

「・・・出でよ犬神」

かく言う俺も黒ローブから力を貰った。俺の能力”犬神”は頭の中で想像した犬科の生き物を具現化出来る力。俺と観山の他にも亜門は”異門”の能力を、赤桐は”捕食”の能力を、河内は”音響”の能力を、蛾郎は”振動”の能力をそれぞれ貰った。

「さて、そろそろ行くぜえ」

観山達は腰に差した剣やナイフを引き抜き言い放った。

「な・・・なあ、観山本当にやるのか？」

俺は再び観山に問うた、これから行う行為は悪魔の所業。

「当たり前だ！・・・あのカスールって村を滅茶苦茶に壊してやる」

そう言いながら嗤う観山は本当の悪魔に見えた・・・。

「はあはあはあ・・・くっ・・・はあはあ」

地面に膝をつき、息を切らせる龍也の前には大小無数のクレータが出来ている。

「新しい術・・・簡単には・・・完成しないか」

「うわ！・・・何をやってたのよあんたは」

龍也が息を整えていると結がやって来た。

「・・・結、どうした何かあったのか」

龍也の言葉に結は頭を振る。

「出来たのよ、10秒以内に全部」

結の言葉に龍也は驚いた、なにせ離れてからまだ10分も経っていなかったから。

「ほう、それでは見せて貰おうか」

龍也の言葉に挑戦するように結が氣を練り始めた。結が氣を練り始めると同時に龍也も心の中でカウントを始める。

「どうした？」

結は動かない、自身の前に大きな気球を浮かべたまま目を閉じている。

「どうした結このままだとタイムアップだぞ」

龍也は心の中でカウントし遂に8秒経った頃ようやく結が動き出した。

「……よし、むっ」

結はまず1秒かけて巨大な剣を作り出す、そして剣の柄を伸ばして槍にする。

「……出来たわ」

結はそう言つて柄が伸びた巨大な剣をこちらに差し出す。

「ふむ、確かに時間以内には出来たが……それは何だ」

「ふふ、剣と槍よ龍也言つてたでしょ実践に向いた形で良いって。だから一緒にしてしまつたの……これじゃダメ？」

最初の方は高飛車に、最後の方は自信なく言う。

「……生金・抜刀」

「ふえ？」

龍也は地面に手を当てると生克術で自身も剣を作り構えながら言う。

「この剣は地面の中に含まれる砂鉄を集め、圧縮して作られた剣だ。強度切れ味共に並……これを折って見る」

龍也はそう言つと結に向かって剣を振るつた。結も反射的に氣剣を振るい両者が激突する。金属同士がぶつかる高い音を響かせ衝突する砂鉄剣と氣剣。

ザクッ

折れたのは砂鉄剣、半ばからポツキリと折られた砂鉄剣は地面に突き刺さつた。

「……合格だ、よく頑張つたな結」

龍也の言葉を聞いた結はへたれ込んで地面にへたり込んだ。

「ただし……剣と槍も10秒以内に作れるようになっておけよ」

剣と槍がうまく作れなかつた結の心の内を突くように龍也は囁いた。

そうして龍也と結は帰り支度をして村へ帰って行った……。

昼、

龍也と結が2人で村へ歩いていると、前方から煙が立ち上っているのが見えた。

「ねえ、あれって村の方角よね？」

「……結、村に着いたら村人達を避難させる」

龍也は結に言い残すと影世界を使い村へ駆けていった。

「これは……」

龍也は影世界から飛び出しカスールの村を駆け抜ける。

家々は燃え、そこから中に人が倒れている。

「きゃあああああ！」

龍也が燃え盛る村の中を駆けていると、少女の悲鳴が届いた。

「っ！……ミリイか」

龍也は悲鳴が聞こえた方へ駆け抜ける。

「へ……へへ、可愛いなお嬢ちゃん」

「こ……来ないで！」

龍也がたどり着いた時、そこには家の壁に追い詰められたミリイとミリイを囲むように2人の男が居た。

「……生木・斬風」

龍也は圧縮された風の刃を2つ作り男達の首へ放った……。

「大丈夫かミリイ」

「はあはあ……龍也……さん？」

2つの頭が地面に落ちるのを尻目に龍也はミリイへと駆け寄る。

「一体何があつた……これは」

「わかりません！……わからないんです……急に6人の男達が

暴れ出して村人達が次々に殺されていつて・・・」  
龍也はミリイを抱きしめ、落ち着かせながら状況を把握していく。  
「・・・・・・・・状況はわかった、ミリイはここに居る！」  
「・・・・・・・・影世界！」  
龍也は顕現レベル4を発動し、影世界に潜った。残りの賊を駆逐するため・・・・・・・・。

【Side 美優】

「よい・・・しょー！」

私がそれを見つけたのは血の付いたシーツをベッドから引きはがしている時だった。

「?・・・ベッドの下にまで血が・・・」

私はシーツをベッドの上に置き、ソレを引き出した。

「・・・・・・・・コレって」

私が見つけたのは昨日龍也さんが着ていた血みどろの服・・・あのやろーう昨日私が注意したにも関わらず脱いだ後ベッドの下に押し込めてやがったな！

「むむむ・・・これは要注意ね・・・龍也さんは後片付けをしない、ずぼらな性格つと」

私は昨日の夜寝る前に作った”妻の嗜み”に龍也さんの隠れた性格を書き込む。

「あら・・・何の音？」

私が妻の嗜みを置いて、一休みしている時にソレは起こった。

「!・・・今の音、何？」

私が外に出ようとした時、ドアが乱暴に開かれ6人の男達が押し入って来る。

「だ．．．誰!?」

「うるせえ!」

「痛つ．．．．．うう」

私は先頭にいたくすんだ金髪の男に平手打ちをされて床に倒された。

「．．．．．おい、コイツか?」

「ああ、間違いない．．．．．昨日の夜、安藤と一緒に家の中に入って行った女だ」

男達は倒れ伏す私の上で何かの確認をしているようだった．．．．．  
．．．．．安藤?

「何?何なの!あなた達．．．」

「うるせえって言ってるんだこのクソアマが!」

「うう」

くすんだ金髪の男は私を殴り、ベッドに押さえつけると口に布の様な物を押し込んで来た。

「おい、亜門お前は外を見張ってる!」

「ええ．．．．．ちつ、わかったよ」

金髪男は私に向き直ると歯を見せつけるように嗤った。

「はははあ、待ってるよ．．．．．今から直ぐ犯してやるからなあ!」

「!?!?．．．．．むうう!．．．．．むうう!．．．．．」

金髪男の言葉を聞いた私はとにかく恐怖で一杯だった。この場から逃げて、逃げなくちゃ!．．．．．その一心で力の限り暴れた。

「おいおい、暴れんなよ．．．．．どうせもう安藤とヤツてんだろ．．．．．なら良いじゃねえか．．．．．よ!」

びりびりと金髪男が私の服を破いた。

嫌!龍也さん以外となんて死んでも嫌あ!

私は必死に抵抗して金髪男に抗った、でも所詮は女の非力な力。金髪男の手が下着に伸びたその時、

「くつ．．．．．おい、観山止める!」

4人の内一番後ろに居た男が金髪男の手を止めた。



龍也は部屋の中を見渡すと観山達に忠告をした。

「は、誰が！」

観山は能力を使い一瞬で龍也の背後に回る、そして手に持ったナイフを突き刺した。

ガゲツ

金属と石がぶつかった様な嫌な音をたてナイフは弾かれる。

「裏秘術・呪いの理」

龍也は観山達に対して呪いをかけた。

「これ以上俺と美優に攻撃を加えたらお前は死ぬ」

龍也は観山に対して最後の忠告を告げた。

「下らねえ！」

それに対して観山は剣を抜き放ち振りかぶる。

ズチャツ

観山が剣を振りかぶった瞬間、呪いによって観山の心臓は潰れた。

「コは！」

観山は声とも音とも判別がつかない音を出して倒れた……。

「お前達も動くなよ……コイツみたいに成りたくなかったらな」

「それはそれは……怖いですねえ」

龍也の登場によって強盗は鎮圧された、しかしここに新たな闇が降臨した……深く、深い漆黒の闇を纏った黒いローブが。

「貴様は……エル!?」

龍也は黒ローブが手に掴んでいるモノを見た瞬間叫んだ。

黒ローブが掴んでいたモノは……力なく腕を下げたエルだった……。

























































## 第13話 「其の名は……」

はじめての異世界 第13話 「其の名は……」

「エル!？」

「こうして面と向かってお会いするのは初めてでしたねえ。私の名前はナゴーブと申します、以後お見知りおきを……ああ、そうでしたコレはお返し致しますよ」

ナゴーブはそう言つて手に掴んでいたエルを投げ捨てる。

「エル!……大丈夫かエル」

「りゅ……やさま……気……付けて奴……は」

「くくく、そんなボロ雑巾を心配するなんてあなたも酔狂ですなえ」  
その言葉を聞いた龍也は静かにエルを横たえるとナゴーブを睨んだ。

「手前は……殺す!」

龍也は一息で踏み込むと掌底を放つ……だが、

「無駄」

龍也の掌底は容易く止められた。

「!?!……くっ」

「遅い……」

ナゴーブは龍也を隣の家へ投げ飛ばした。

投げ飛ばされた龍也は家に激突しそのまま崩落する家に飲み込まれていった。

「やれやれ、まさかこの程度ではないでしょう……本気をお出し

なさい」

ナゴープの言葉に応えるように家の瓦礫が吹き飛んだ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・顕現レベル10」

龍也は最強のレベル10を発動し全身から莫大な氣を迸らせる。

「場所を変えよう・・・・・・・・ここでは闘いたくない」

龍也はそう言うと一瞬で村を跳び越え荒野を目指した。

「やれやれ性急なお方ですねえ」

ナゴープはそう呟くと景色に溶け込んでいった・・・・。

「来たか」

龍也は前方を見据える、そこには岩山しか見えなかったが突如景色が歪み、ナゴープが現れた。

「さあ、ここなら存分に戦えるでしょう・・・・あなたの力の底、見せて貰いますよお」

「その頃まで貴様が生きていらねばな！」

そうして漆黒の闇と希望の光は激突した・・・・。

「生木・樹海濃霧」

龍也が靴で地面を叩くと大地を埋め尽くす程の木の蔓が生えナゴープを圧殺せんと迫る。

「甘い・・・・メルト」

ナゴーブがかざした手から炎弾を幾つも放つ。だが炎弾が蔓を焼く早さより、蔓が生まれる早さの方が早くあつという間にナゴーブは蔓に絡め取られた。

「ほう！私のメルトで焼き切れないとは・・・メルト・ドラゴン」  
ナゴーブの正面に5m程の炎球が出現した。炎球の熱波で蔓は焼き尽くされていく。

「お行きなさい」

ナゴーブが手を振ると、炎球はドラゴンに姿を変えて龍也へ迫る。

「・・・生水」

炎のドラゴンに対して龍也は両手を天に掲げた、すると遙か上空に大量の水が集まり始めた。

「・・・っ・・・ぎりぎりか・・・生水・水仙雲」

龍也は上空に溜まった大量の水をそのまま地面へ叩き付けた。

上空から高速で叩き付けられる大量の水に炎のドラゴンもナゴーブも龍也でさえも飲み込まれていった。

大量の水は岩山や地面を穿ちながら周りへ浸透していく。当然中心部ほど強大な水の奔流が襲う、100mを越える岩山すら砕いていき、5?四方を水浸しにしてようやく水の浸透は終わった。

「奴は何処へ行った？」

水の奔流によつて遮る物が無くなった荒野でただ1人龍也だけが立っていた。

「ちっ少し服が濡れたな、影の世界に入るタイミングが遅すぎたか」

「・・・」

「あれ程の水流を受けてほんの少し濡れた程度とは・・・」  
龍也の正面の景色が歪みナゴーブが姿を現した。

「・・・このままでは決着が着きそうにないな」

「くくく、お互いに絶対回避の術を持っているようですしねえ」  
龍也とナゴープは少しの間ならみ合う。

「・・・この手は使いたく無かったが仕方がない・・・裏秘術・呪いの理」

龍也は自身とナゴープに呪いをかける。

「この戦いに置いて絶対回避の術を使った者に死を！」

龍也が言霊を紡ぎ終わると同時に両者を紫色の光が包み込む。

「これはこれは・・・推察するに対象者に何らかのルールを強制させる術ですか。破った代償は死・・・ですがブラックドラゴンの時を見るに必ずしも死ぬわけでは・・・無いようですねえ」

「・・・さあな」

ナゴープの言葉に口を閉ざす龍也、相手にこれ以上の情報を与える愚は犯さない。

「とにかくこれでお互いに絶対回避の術は使えなくなった・・・」

・ここからが本当の勝負だ」

龍也の言葉に応えるようにナゴープもローブの中から黒い表紙の魔導書を取り出した。

「まさかこんな場所で”魂の射出”を使うことになるうとは・・・  
こうして龍也とナゴープの死闘は幕を開けた・・・」

「魂の射出・・・”変質”」

ナゴープは魔導書を前にかざすと言霊を紡いだ。

「させるかぁ生土・鋼盤断壁！」

龍也は右手を地面へと突き刺した、龍也の呼びかけに答えるように大地が蠢き100m程の大きさの崖が出現し地響きを響かせながら

ナゴープへと迫る。

「魂の射出・・・”射出”」

大地の壁がナゴープを飲み込む直前、ナゴープから何か放たれた。放たれた何かは大地の壁を容易に切り裂く、真つ二つに切り裂かれた大地はナゴープを通り過ぎ後方へ遠ざかっていった。

「何！・・・くっ」

龍也は大地を切り裂いた何かを横に跳んで躲す。

「まだまだ！魂の射出・・・変質」

ナゴープは龍也へ追撃を放つため更なる言霊を紡ぐ。

「・・・くっ、生木・斬風！」

単純な力では敵わないと悟った龍也は最速の術を放つ。そして放つと同時に龍也も疾走する。

「無駄」

風の刃はナゴープではなく手に持った魔導書に辺り霧散する。

「魂の射出・・・射」

「オラア！」

龍也は刹那の差で勝利、魔導書を蹴り飛ばすことに成功する。

音速に倍する速度で蹴られた魔導書は遙か彼方へと飛んでいく。

「くっ、メルト・・・」

「遅い・・・生火・・・」

ナゴープと龍也はお互いに手を向ける。そして、

「ドラゴン！」

「呪禁炎！」

両者の間で炎の子竜と炎の竜巻がせめぎ合う。だが拮抗したのは一瞬だけ、炎の子竜は炎の竜巻にかき消されナゴープも炎に飲まれていく。

「おぐあああ・・・歪め！」

炎に飲まれたナゴープは咄嗟に空間を歪めて脱出しようとする。だが、  
バツンッ

何か切れる音が響きナゴープはそのまま炎の渦に巻き込まれて行った。

「こ・れ・で・トドメだああああああああああ」

龍也は右手に千手を込め炎の渦へたたき込む。炎の渦と光の極光が混ざり合い大爆発を起こし辺り一面を白く染め上げていった……。

白い光が収まった後に立っていたのは龍也だけだった。この勝負の勝者は龍也……

「はあはあ……これで……」

「勝つタと思う力？」

では無かった、突然龍也の背後に黒い影が出現した。

「つつつ！」

「遅イ」

龍也は咄嗟に反応するが黒い影の攻撃までは防げなかった。

「ぐああああああ」

黒い影の攻撃で吹き飛ばされた龍也は数十m吹き飛んだ。

「……ぐつ、何故……」

龍也がいた場所にはボロボロのロープを羽織ったナゴープがいた。

「ナゼ生きているのか解せないといった顔だナ……この程度で私が死ぬ訳がなからう」

ナゴープは時折、機械的な声を出しながら龍也に相對する。

「……お遊びはここまでだ、”概念フィールド”展開」  
ピシッ、パリーン

ナゴープの言葉に呼応するように世界がガラスのようにひび割れた。

「こ……こは？」

龍也は急に重くなった体を叱咤して辺りを見渡す。それは異様な光

景、先ほどまでの荒野は無くなり辺り一面が紫一色に染まっていた。紫の地平に紫の空・・・何処かで見た光景に龍也は戸惑う。

「これ・・・はあの時の」

龍也達をこの世界へと落とした空間、あの時教室に展開されていた異空間。

「ほう、概念フィールド内部で動く喋ることが出来るとは・・・驚いた」

ナゴーブはここに来て初めて驚愕の姿勢を見せた。

「概念・・・フィールドだと？」

「くくく、冥土の土産に教えて差し上げましょう概念フィールドとは世界の一部を改ざんする”暗黒教団”にのみ許される秘術！」

「馬鹿な！・・・世界を自分の思い通りに造り替えるなど・・・  
・出来る訳がない」

「それが出来るのですよ・・・私ならば！」

龍也は影世界を扱えるから理解できる、世界を造り替えることがどれ程難しいことかを。

「くくく、最後です略式ではなく本来の名前を名乗っておきましょう・・・私の名前はナゴーブ。暗黒教団序列第4位、ナゴーブです」

ナゴーブはまるで最後の別れと言わんばかりに名を名乗り手を振る。ナゴーブの合図に合わせて大小無数の剣が龍也に向けて放たれた。

「さよなら・・・渡り人さん」

「我は・・・汝の・・・」

「？、何を言っ・・・」

「故に我は汝の力を借り受ける・・・裏秘術・神降ろし」

神降ろしを発動した龍也は今までの鈍さが嘘のように素早く動き剣を躲す。

「馬鹿な！？この概念フィールドで私以外が動ける訳が・・・」

驚愕するナゴーブをよそに龍也は素早く間合いを詰めていく、その速度は本来とは比べるべくもなかったがナゴーブとの距離を数秒で

詰める。

「ゴ丁寧に名乗ってくれてありがとよ！俺の名前は安藤 龍也、冥土の土産に覚えておけ！」

龍也は千手を出現させナゴープをつかみ取る。

「生木・・・生火・・・生土・・・生金・・・生水・・・秘術・滅界！」

そして素早く詠唱すると最強の術、滅界をナゴープに喰らわせる。

「お・・・おおおおおおおおおおおおおおお」

ナゴープは全てを焼き尽くす閃光の奔流に飲まれ消えていった。

今までの死闘の最後を飾るにはあまりにも、あまりにも呆気ない最後であった・・・。

びしっ、パリイイン

展開の時と同じ様に紫の世界がひび割れ元の世界が現出した。

「・・・今度・・・こそ」

ぐばああああああああああああ

「つつ！これは触手！？」

龍也は足下から出現した触手によって絡め取られてしまう。

「許さん！許さん！許さんぞおおお」

そして地中からナゴープが出現する。度重なる攻撃により黒いローブが千切れナゴープの素顔が窺えた。

ナゴープは素顔は金色の骸骨だった。ドクロも腕の骨も足の骨も全てが金色、そして触手はナゴープの体の骨から直接生えている。

「くっ、しっこい！」

龍也は神降ろしの力で触手を引き千切りナゴープへと落ちていく。

「これで最後！」

「うはああああ」

両者が最後の一撃を繰り出したその最中、

「これは一体どういう状況なのでございませう……」  
さらなる絶望の権化が現れた……。

ナゴーブの一撃も龍也の一撃も相手に届くことは無かった。なぜなら、新たに現れた存在によって受け止められていたから。

「な……に」

「あ……イ……イエグハさま」

恐るべきはその圧倒的な存在感、百戦錬磨の龍也も自我を失ったナゴーブでさえ正気に戻ってしまう圧力は重圧となって両者を襲う。

「ちい……生金・切断地獄」

龍也は即座に腕を振り払い追撃を加えた。何百という剣が槍が刀がナゴーブ達を埋め尽くした。

「はあはあ……はあはあ」

度重なる大技の連発によって減った気が体力消耗という形で龍也にのし掛かる。

「無駄でございます」

だが新たに出現した存在は腕を軽く振った衝撃波だけで全ての剣を破壊する。

「まずは自己紹介からでございますね、私の名前はイエグハ……暗黒教団序列第3位、イエグハでございます」

自己紹介を終えたイエグハは龍也に背を向けナゴーブの方へ歩いて行った。

「……敵に背を向けて良いのか？」

「……敵ですか、残念でございますがあなた程度では敵にもなら

ないのでございます」

イエグハは龍也のことなど齒牙にも掛けずナゴープを掴むとナゴープ共々消え去った。

「敵にもならない・・・か」

龍也はイエグハの残した言葉を呟いた、龍也の呟きは誰にも届く事無く空に溶けて消えていった・・・。









































### 第13話 「其の名は・・・」(後書き)

なんとか、今日中に投稿出来る分だけ投稿しました。第一章は残り2話で終了する予定ですので、明日か明後日には投稿出来ると思います。

## 第14話 「結」

はじめての異世界 第14話 「結」

龍也が村まで戻って来た時、既に火は鎮火されていた。

「あ！龍也あんた何処行っていたのよ」

龍也の姿を確認した結は龍也へ駆け寄る。

「・・・結、村の皆は？」

龍也の問いに俯き答えずらそうにする結。

「・・・そうか、では何人生き残った？」

「・・・生存を確認出来たのは16人だけ」

結はすすり泣きながら答える。

「ねえ、なんで？・・・なんでこんな・・・酷すぎるよぉ」

「結、ここは地球じゃない・・・酷な話だが誰が何処で死ん

でもおかしくない」

龍也はすすり泣く結を抱きしめながら言い聞かせる。

「さあ、行こう死んだ人達を弔ってあげなきゃ」

「・・・うん」

龍也は結の背中を押しながら歩いて行った・・・。

【side 龍也】

夜、

龍也は夜の広場に1人佇んでいた。あの後、龍也は生き残った人の人数を確認し。亡くなった人の亡骸を埋葬し弔った。葬式の途中ミライが泣き崩れ犬飼に対して罵声を浴びせるといふハプニングがあ

つたがそれ以外は特に問題も無く事を終え現在に至る。

「ねえ、どうしたのお兄ちゃん」

人気のない広場で1人佇む龍也の元へかなえがやって来た。

「・・・かなえ・・・か、ごめんな不甲斐ないお兄ちゃんです・・・俺は！」

「そんなに自分を責めないで、お兄ちゃんのお陰でミリイさんも美優さんも助かったじゃない・・・私はもうお兄ちゃんの側に居られないけど私はいつもお兄ちゃんのことを応援しているから・・・頑張れ！お兄ちゃん悪の組織になんて負けるなあ」

龍也は涙を堪えて目を閉じた、そして再び目を開けた時、かなえはいなかった。

あの事件の生存者は龍也を含めて17人、その中にかなえは含まれていなかった。

「俺はまた守れなかった・・・俺は・・・」

龍也の言葉に天が呼応するように雨が降り始めた。ぽつぽつと降り出した雨は龍也の瞳に当たりそのまま頬を滑り落ちていく。その後も止めどなく、雨は龍也の頬を流れていった・・・。

龍也は数分雨に打たれると家に帰って行った。この後も村の再建から始まり、脱走した犯人の追跡や暫定的な家の建設など龍也にしかできない仕事は山のようにある。

家に入った龍也を突然光の剣が襲う。

「・・・・・・・・結、一応聞いておく・・・・・・・・何の用だ？」

「・・・・・・・・痛つ~~~~、やっぱりまだまだ龍也には勝てないわね」

結は背中をさすりながら立ち上がり龍也を真っ直ぐに見据えた。

「話があるの・・・今、時間ある？」

「ああ、良いぜ……コッチで話そう、ついてこい」  
龍也はそう言うと結を自室へと招き入れた。

「……で、話とは何だ」

「単刀直入に言うわ……私はもつと強くなりたい！」

結は真剣な表情で自身の思いを龍也へとぶつける。

「……結、気持ちは分かるが焦るな。修行を初めてまだ初日、現在行っている氣のコントロールは一番重要な基礎だ。手抜きは出来ない」

「でも……そうだわ！影世界があるじゃない、影世界に連れて行って貰ってそこで修行すれば良いんだわ」

結は名案だ、と言わんばかりの剣幕で龍也に詰め寄る。

「……駄目だ」

「何だよ！」

結は自身の考えた名案が即座に却下され憤りをあらわにする。

「はあ、良いか良く聞け結。影世界はな確かに此方の世界とは時間の流れが……いや密度が違う」

「こちらの世界の世界の1時間が影の世界では1日だ……」

「その何が問題なのよ！」

龍也の釈然としない態度に思わず口調に怒気が籠もる。

「まあ、話は最後まで聞け。良いか影世界の時間はこちらの世界の24倍の密度だ、何の対策もせずにそんな場所へ放り込まれたら内部から弾けて消滅してしまう」

「……どういうこと？」

結は頭にクエスチョンマークを掲げて龍也へと問うた。

「良いか、時間とは重力のようなものだ。ただの人間がいきなり100倍、1000倍の重力の場所に放り込まれたら潰れて死ぬだけだ……これが同じことが時間にも言えるんだよ」

「つまりただの人間では影世界の圧縮された時間の中では生きていくことはおろか、足を踏み入れる事すら不可能。俺は自身の氣を変化させて体を守っているため大丈夫なだけだ」

龍也の説明を受け、渋々だが納得する結。

「……なあ結、お前本気で強くなりたいか？」

龍也は真剣な表情で結に問う。

「……1つだけ、劇的に強くなれる方法がある。ただし！  
・死め危険も高い」

龍也の言葉を受けて一瞬だが震える結。しかし次の瞬間には決意を秘めた瞳で龍也を見据える。

「……分かった、場所を変えるぞ」

龍也と結は人気のない荒野へと場所を移した。ここから長い長い夜が始まった……。

夜の闇が深くなった頃、村から数？離れた荒野に結と龍也の姿があった。雨も上がりまるで2人の挑戦を天も祝福しているかのようだった。

「良いか、これから行つのは”覚醒”と呼ばれるものだ」

「覚醒？」

聞き慣れない言葉に首を傾げる結。

「ああ、覚醒とは幻想世界を能力者に流し込み能力者の奥底に眠る特異能力の全てを無理矢理引き出す言わば裏技だ」

言いながら龍也は結の前まで歩いてくると結の頭へ手を乗せる。

「準備は良いか？」

「大丈夫……覚悟なら村を出た時にしたから」

結の言葉に頷く龍也

「……では、行くぞ！」

かけ声と共に龍也は幻想世界を結へ流し込む。

ブシュ

龍也が幻想世界を流し始めると結の能力が自己防衛のため龍也の指を切り落とす。だが龍也はじっと目を閉じると限界まで幻想世界を流し込む。

「……ここまでか！」

言うが早いか龍也は結の頭から手を放す。

「はあはあ……結、負けるなよ！」

### 【side 結】

「……では、行くぞ！」

龍也はそう言うのと私の頭へ手を置き幻想世界を流し込んだ。最初は幻想世界を流し込むと言う表現の意味が分からなかったけれど、今なら理解出来る。龍也から止めどなく何か暖かいものが私の中へ流れ込んで来た、私の意識はその膨大な何かに飲み込まれていった。

「うん……ここは？」

どうやら私は気絶してしまったようだ。未だにぼうつとする頭を押さえていると後ろに人の気配がした。

「ねえ、龍也私はどれ位気絶して……」

私は後ろをふり返る龍也へと問いかける。だがそこにいたのは龍也ではなく……黒いコートを羽織ったガスマスクだった……。

「貴様は！」

ガスマスクを見た瞬間、考えるより早く体が動いた。

「はああ！」

私は1秒で氣劍・大剣を作り出すとガスマスクへ振り下ろした。

ブオン

ガスマスクは後ろへ下がり氣剣を躲す。

「ちい！避けたか・・・ならば！」

私は後ろに避けたガスマスクに向かって新たな術を放つ。

「氣劍・槍」

私は氣劍の形状を槍に変化させガスマスクへ投擲した。

ガイン

ガスマスクは前の時と同様にナイフで氣槍を弾いた。そしてそのまま私に向かって疾走してくる。

「・・・出来た・・・さあ、来なさい！」

私は氣剣を2本作り出すと私の氣を全て2本に集める。私の實力では劍1本に全ての氣を収束させることは出来ない、その為2本の氣剣を作り出し全ての氣を2つに分けて込めた。

その間にもガスマスクは疾走して迫ってくる・・・そしてガスマスクが間合いへ入った。

でも無闇矢鱈に振り回すことはしない。私はガスマスクを静かに待つ・・・そして、ガスマスクの拳が私に迫る・・・ここだ！

「はあああ！」

私はガスマスクが攻撃すると同時に劍を振り下ろした・・・。

「はあああ・・・痛っ・・・ぐう」

私はガスマスクのナイフを肩に受け衝撃で受け吹き飛んだ。だけど勝ったのは私だ！

「はあああ・・・やった・・・ついにやった！」

私の前にはガスマスクの首が転がっている。実力で劣っている私はカウンターによる一撃に全てを賭けた。2本の劍を両方攻撃に使ったのは効果的だったわ。ガスマスクは1本は防いだけれど2本目に

よる一撃は首に当たった。その結果、奴は死に私は生きてる！

「はあはあ・・・うぐう・・・うう・・・つづあ！」

私は肩からナイフを引き抜いた。その時の痛みで再び気絶しそうになっただけ。

「はあはあ・・・。仇の・・・顔を」

私はガスマスクの首に近づき顔を覆うガスマスクをはぎ取った・・・

・・・そこにあつた顔は・・・。

「う・・・そ・・・何で？・・・。何で龍也の顔が・・・」

その言葉の答えは私の手の中にあるガスマスクが物語っていた。つ

まり私はこの手で龍也を・・・大切な師匠を、大好きな人を・・・

・・・

「い・・・いやあああああああつあああああああああああああ

ああああ

誰もいない荒野に結の叫びが響渡った、絶望の籠もった叫びが・・・

【side out】



























## 第15話 「斬魂」

はじめての異世界 第15話 「斬魂」

「い・いやあああああああつあああああああああああああ  
あああ」

突然、龍也の前で結が絶叫した。

「結・・・がんばれ」

龍也はじつと結を見守っている。結が戦っていたガスマスクは幻想世界の能力を使って作られたまがい物。だが、精巧に作られたガスマスクは本物と遜色なかった。

実力は伴っていないかった為、結でも勝てた。しかし、本当の地獄はこれから始まる。

「さあ、行くぞ結！」

龍也は結の額を軽く小突いた。すると、  
「うあああああああああ！」

結が獣のような叫び声を上げて倒れる。龍也は結を支える、そして  
呟いた。

「結、つらい記憶だったとしても乗り越えろ。絶望に吞まれるな、  
絶望を吞み込むんだ！」

【side 結】

「う・・・うん・・・ここは・・・どこ」

私は何を・・・そうだ！確か龍也に呼ばれて・・・仇と闘って、そ

れで・・・仇が龍也で・・・

「・・・私は何を言っているの・・・龍也が仇なんてそんなこと・・・」

「そうね、龍也は仇ではないわ」

私は声のした方を向いたそこには・・・私がいた。

「あなたは・・・」

「私はあなた、あなたは私。私達は2人で1つ」

「何を訳のわからないことを・・・」

「あなたが私？私があなた？・・・違う！私は私、この世に1人しかいないの。」

「・・・なのに私にだけ嫌な記憶を押しつけるなんて・・・酷いひとねあなたって」

「ああ、何も言わなくて良いわ直ぐに私の言っている意味が分かるから。私もね疲れちゃったの、あなたの記憶を封印し続けることに・・・だからあなたに返すね。私の記憶」

もう1人の私がそう言った瞬間私の中に記憶があふれ出る。私が今まで信じていた偽りの記憶ではなく本物の記憶が・・・。

暴力を振るう父、優しくった母、そして私を犯そうとする兄・・・あの忌まわしき夜の出来事が頭の中に蘇える。

「うあ・・・何これ？・・・いや！いやいやあああああ」

それは記憶の奔流だった。あの夜の記憶が止めどなく私の頭の中へ溢れてくる。

「ううう・・・もう限・・・界」

私の頭に収まりきらない記憶・・・私の闇は私という器をあっという間に満たしあふれ出てくる。

そして私の意識は静かに堕ちていった・・・。

【side out】

龍也が倒れた結を介抱しようと触れた時それは起こった。

バチイ

「く！」

結に触れた瞬間龍也の手が弾かれた。いや、正確には”斬られた”  
龍也は右手を見る、手首からひじまで縦に切り裂かれている。

「・・・これが結の力か」

龍也は顕現を使い手を元に戻し結を見る。

龍也の手を切り裂いた黒いオーラはあつという間に結の体を飲み込んでいく、完全に飲まれた後に残ったのは黒いオーラの塊。黒いオーラはスライムのようにうねり形を変えていく。

あのオーラが俺の右腕を斬った正体・・・”斬魂”の能力か

結の持つ特異能力、斬魂は”概念を斬る”ことが出来る。すなわち、斬魂の能力に斬れないものは無い。仮に斬魂に魂そのものを斬られた場合絶命必死、正しく一撃必殺。

「・・・まずいな、今は神降ろしが使えな・・・づお！」

龍也は黒いオーラから放たれる刃を紙一重で躲す。斬魂の一撃をまともに喰らえばいかに龍也だとして死は免れない。

ズズウン、ズズウン、ズズウン

龍也は結から放たれ続ける黒い刃を躲し続ける。

「くう！・・・生火・呪禁炎」

龍也は放たれる刃を躲し炎熱系最強の術を放つ。だが、

サシユツ

10mを超える火の玉は容易く斬られ、霧散する。

「ならば、生水・水仙雲」

龍也は続けて氷水系最強の術を放つ、辺り一帯の水気が集まり5m程の大津波が黒いオーラを飲み込む

ザシヤツ

だがそれすらも斬られる、水仙雲は龍也氣を使い周囲の空気中含まれる水分を自在に操る術だが、斬られた水は動かない。水を動か





【side out】

「くっ・・・限界か」

龍也はあれから5分間結の攻撃を躲し続けた。そして、

「ぐあ！・・・く・・・そお」

龍也の足を黒い刃が切り裂いた。片足を失い地面へ崩れ落ちる龍也。度重なる攻撃で既に顕現を使い切っていた龍也に次に繰り出してくる攻撃を防ぐ手立てはない。

龍也が己の死を覚悟した時、結を包む闇から光の柱が立ち上る。

「これは・・・」

光の柱はいとも容易く天を突き黒い闇を消し去っていく。そして黒い闇を全て消し去った後、光の柱も消えていった。

光の柱が完全に消滅した後には1人の少女が立っていた。

「結・・・なのか？」

龍也は思わず問いかける、なぜなら

「他の誰に見えるのよ・・・ばか」

あまりにも美しく、凜々しかったから・・・

「ただいま、龍也！」

「おかえり、結」

結は龍也の元へ駆けていき龍也に抱きつく。龍也も結を抱きしめ返す、2人は誰もいない荒野の真ん中で抱きしめ合う。まるでお互いの絆を確かめ合うかのように強く、強く、強く・・・。

To be continued









































































## 第15話 「斬魂」(後書き)

今回、結の過去編を本編で描くか否かで迷いに迷いました。結論は描かない！

その内番外編という形で結の過去編を出すと思います。結の忌まわしき夜がいかなるものか見たい人はそちらをご覧ください・・・では。

生き残った奴ら（15話現在）

? 安藤 龍也

本作の主人公。

? 歳掛 結

本作の3大ヒロインの1人、特異能力”斬魂”を有する。

? 海藤 美優

本作の3大ヒロインの1人、龍也に助けられた過去を持つ。

? エルルン・ラファイート

本作の3大ヒロインの1人、裏秘術・影世界などの陰陽術を習得している。カスール村襲来の時ナゴーブと戦い重傷を負う。心の内にエミリアというもう一つの人格を持っている。

? ミレイ・クロスフォード

エルの付き人、ヒロイン候補

? 山下 エリナ

エルの付き人その2

? 神田 現

とある特異能力を持っている。

? 柚木 澪

とある特異能力を持っている。

? 阿澄 智樹

とある特異能力を持っている

? 犬飼 健二

観山と共に村を襲撃した犯人の1人だが美優を助けようとしたり、壊れた村の瓦礫を撤去したりと根はまじめで良い奴。それらの功績や深く反省していること+観山に従っていた経緯を鑑み。罪を問われなかった。

? ミリエル

愛称はミリイ、村人で生き残った1人。村長の娘、ミリエルにはマリエルと言う姉が居たが半年前に死亡。

? リーン

運良く生き残った村の子供、11歳の女の子。

? カルマ

運良く生き残った村の子供、9歳の男の子。

? エルマ

カルマの妹、5歳の女の子。

? ラウゼ

運良く生き残った村の子供、6歳の男の子。

? フェルト

運良く生き残った村の子供、8歳の女の子。







第16話 「悪意からなる種子」 改訂版

コツコツコツ

と暗い闇の中を1つの影が歩く、影はロープを羽織り漆黒の表紙に赤い手形の本を持っている。

影の男・・・ナゴーブは闇の中を歩く。

「・・・誰です、そこにいるのは」

唐突にナゴーブが暗闇に向い話し掛ける。

「くはははははは、相変わらず鋭いな・・・面白れえ！」

「これはこれは、クームヤーガさん・・・何用ですか？」

闇の中から現れたのは1人の男、黒い髪から犬耳が生えており、犬歯が異常に発達した男・・・クームヤーガ。

「いやなに、あまりにも暇なんでよお・・・ちよつとからかいに來ただけだ」

ナゴーブの問いに笑いながら言葉を返すクームヤーガ。

「これはこれはそうでしたか・・・それでは今スグ帰レ」

「ああん？」

男はナゴーブの声質が変わったことに眉を顰めた。

「なんだあ？今日は随分と機嫌が悪いな」

「ナゴーブは先ほどの調査でこつぴどくやられたのでございます」

そこに新たな男が現れた。白い髪に顔を認識できない男。その容姿はまるでのつぺらぼうの様だった。

「それで？ナゴーブさん、検体はお幾つ取れましたか？」

白いのつぺらぼう・・・イエグⅡⅡがナゴーブへ問いかける。

「これはこれはイエグⅡⅡ八様・・・今回は質の良い渡り人が3体も取れましたも・・・3体とも死体ですが」

「おや？安藤 龍也に殺された分しか回収出来なかつたのですか？」

「はい、どさくさに紛れて生き残った2体も回収したのですが・・・逃げられてしまいました」

ナゴープは口調を変えず、静かにため息を吐いた。

「・・・なあ、前々から思っていたが渡り人を集めて何すんだあ？」  
2人の会話について行けないクームヤーガが2人に問いかける。

「・・・渡り人を集めて”ロガエスの書”の適合者が居ないかどうか調べるのでございます」

「おいおい、確かにロガエスの書の適合者探しは重要だが、何で今動き出す必要がある？ここ数十年探しているが適合者は見つからなかったじゃねえか」

クームヤーガがイエグⅡ八へ問いかける。

「それがついに出現したのでございますよ・・・ロガエスの書の適合者が！」

イエグⅡ八の言葉にクームヤーガだけでなくナゴープまでもが驚く。

「あの26名が堕ちてきてから、”ブリュンナグ山脈”の種子が騒いでいるのでございます」

「それはそれは・・・ではついに我々の計画が始動するわけですか」

「くははは、おもしれえ！俺が暗黒教団に入団してから数百年・・・やっと面白くなってきたあ！」

クームヤーガとナゴープは各々歓喜の声を漏らす。

「ロガエスの書はブリュンナグ山脈の種子が保有し、守っておりますのであなた方は適合者たる渡り人の確保に心血を注ぐのでございます」

「了解いたしましたイエグⅡ八様」

「おうよ！」

イエグⅡ八の言葉に頷くクームヤーガとナゴープ。

「・・・ところでイエグⅡ八様」

「わかっております、適合者でない渡り人はあなたの研究に使って構いません・・・」

その言葉にナゴープはまたも歓喜の声を漏らす。

「素晴らしい！……しかし、それでは近いうちに我々”暗黒教団”の幹部が揃う必要がありますねえ」

「……そういえばナゴープ手前がやられた相手ってのは誰だあ？クームヤーガの問いに口を閉ざすナゴープ。

「……安藤 龍也とか言う名前のお方でございます」

「くはははは！おもしれえリユージャ、リユージャか……覚えたぜえその名前」

クームヤーガは楽しくて仕方がないとも言おうように口の端をつり上げて笑う。

「ではお二人とも行きますよ、ナラトウース様がお待ちです」

「おうよ！」

「ははっ！」

そうして3人は闇の中から消え去った……3人が去った後にはただただ暗い闇が在るだけだった……。





番外編 「忌まわしき夜」(前書き)

遅くなつてしまい申し訳御座いません。この話は結の過去、番外編です。あと、グロ注意です。グロテスクな表現が苦手な方はご注意下さい。

## 番外編 「忌まわしき夜」

番外編 「忌まわしき夜」

懐かしい夢を見た、私がまだ幼い頃の夢。

「お、お母さん……今日は一緒に寝ても良い？」

「あら、珍しいわねいつもは1人で寝ているのに……」

「きよ、今日はそう言う気分なの！」

「あら、そうなの……あら？ 結ちゃん何を手に持っているのかしら」

「え！？ こ、これは……」

「殺人鬼」・キラァ……結ちゃん？

「あう、ごめんなさい」

「まあ、良いわ……それにしても黒いコートにガスマスクだなんて、奇抜な恰好をした殺人鬼さんねえ」

お母さんはそう呟いて私の手からDVDを取り上げた。

「もう、次からこんなもの見ではダメだからね」

お母さんは優しく撫でながら私を抱き上げてくれる。

「お母さん」

「ん？ どうしたの結」

「……大好き！」

「私もよ、結」

それは何処にでもあるような当たり前な幸せ、でも私にはその幸せを享受することは出来なかった……。

物心ついた時から私の家族は母1人だった、父親は私が生まれて直ぐに交通事故で死んだらしい。それ以来、お母さんは女手1つで

私を育ててくれた。けれども、私が5歳の時お母さんは倒れた。原因は極度の過労、お母さんが倒れてから私は施設で育った。

そんな私に転機が訪れたのは6歳の時、お母さんが新たな人に恋をしたのだ。相手はお母さんの担当医だった人、2人は瞬く間に恋人になり結婚した。そうして、私の家族は母と義父、義兄の4人になった。その時、私は生まれて初めて家族の暖かさを知った。優しい母、優しい父そして不器用だけど私のことを思ってくれる兄。けれども、そんな幸せも長くは続かなかった。

再婚して半年が経った時、母の容態が急変したのだ。

母はそれから半年で歩けなくなり、更に1年が経つと話す事も出来なくなつた。そして、再婚してから3年目のある日、突然容態が悪化して母は死んだ。享年26歳。母の死を切っ掛けに家族は変わった。父は私に暴力を振るうようになり、兄も私と話さなくなつた。私が9歳の時の出来事だつた……。

「おい、起きろ！」

「痛っ」

私はお腹を蹴られた痛みで起こされた。

「なん、ですか……パパ」

「さつさと起きろ……この愚図が！」

口答えしたことが氣にくわかつたのか蹴ってくる父親、足に、背中に、お腹に何度も蹴られた。これが母が死んでからの私の日常、私の朝は暴力に耐えることから始まる。

私は父親が病院に行った後、朝ご飯を食べて家を出た。私は家が並ぶ通学路を歩く。太陽が早く沈むこの時期は長袖を着ていても寒

さを感じる。

「おっはよー結ちゃん！」

「おはよう、由美ちゃん！」

そんな寒さを吹き飛ばすような元気な声を掛けてくれたのはクラスの友達、朝ヶ谷 由美ちゃん。私の一番の親友。

「どうしたの？ 結ちゃん元気ないね」

「ええ、今朝家を出たら直ぐ目の前に黒猫がいてね」

私は嘘を吐いた。外に居るときは嘘で嘘を塗り固める毎日。

「ふ〜ん、そう言うときは元気に走る〜〜〜う！」

「ちよ、ちよつと待つて引つ張らないで〜〜〜」

由美ちゃんに引つ張られながら学校に登校する私………たまに私は思う、何で私がこんな目につて。考えても意味のない事なのに……。

キ〜ンコ〜ンカ〜ンコ〜ン

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り、クラスの皆は帰り自宅を始める。皆の表情は早く家に帰りたくて仕方ないって顔してる。でも私はいつまでも学校に居たかった。学校は唯一父親の手が及ばない場所だったから。

「じゃあね、結ちゃん！」

「うん、さよなら」

由美ちゃんは私に挨拶をして教室を飛び出して行った。由美ちゃんが居なくなっただけで私も帰り支度を始める。クラスで私が友達と呼べるのは由美ちゃんだけだから。

「な、なあ歳掛……ちよつと良いか？」

「あら、藤堂くんどうしたの？」

帰り支度を整えた私に声を掛けてきたのはクラスメートの藤堂 和

成君。

「い、いや……外で話そう！」

無理矢理私の手を引つ張り外へ連れ出す藤堂君。私は引かれるままに付いていった。

「……ここで良いか」

体育館脇にある水飲み場の辺りに来ると藤堂君は私の手を放した。

「……あ、あのなあ……お、俺歳掛の事が」

「ダメ！……それは駄目」

藤堂君の言わんとする事を察した私は先んじて返事を返す。

「な、何でだ？」

「……悪いけど私、藤堂君の事好きじゃないから」

私はまた嘘を重ねる。

「それじゃ、さよ」

私が踵を返して帰ろうとした時、

「ちょ、ちよつと待って！」

藤堂君が私の袖を掴んだ。

「きゃ！」

突然掴まれた事によって私はバランスを崩して転んでしまっ

ぶりびりびりっ

「痛った……もう、何するのよ！」

「さ、歳掛……お前それ!？」

藤堂君は私の二の腕辺りを凝視している。それより、謝りなさいよ！私は叫びたい思いを堪えて破れた箇所を見た。

「っ！ 退いて!！」

「さ、歳掛!！」

私は破れた部分を隠しながら無我夢中で駆けた。

「はあ！はあ！はあ！……見られた、見られちゃった」

私は腕を見た、そこにあつたのは内出血をして酷く腫れた腕。とても年頃の女の子とは言えない腕がそこにあつた。

「はあ！はあ！……うう！」

腕を見ながら走っていた私は石につまずいて転んでしまった。

「つ~~~~」

声にならない叫び声を上げた私は足を見た。全力で走っていたためか膝の皮は擦り剥けて破れ、膝は血まみれになっていた。

「痛っ……何処か、休める場所」

私は立ち上がる、そして激痛が走る足を引きずりながら、休める場所を探して歩き出した。

「はぁはぁ……あれ？」

暫く歩いた時、突然私の周りの景色が一転した。先ほどまで閑静な住宅街だったのが今は青々と茂った木々が私を取り囲んでいる。

「何……ここ？」

私は周囲の異変に気が付いた、でもその時既に考える力も残っていなかった私はただひたすら歩き続けた。

「……あれ……は？」

数分あるいは数時間だったのかもしれない。ただ歩き続けていると前方から光が見えた。

私は引かれるように光に近づいて言った。そして光の先に着いた私が目にしたものは。

「……綺麗な湖」

私の目の前には湖が広がっていた。綺麗に澄んだ水の中を色鮮やかな魚が泳ぎ、空にはとても大きな鳥が大空を舞っている。でも私が一番目を惹かれたのは湖の真ん中に佇んでいる男の人。

ここからではよく見えないが高校生位の男の人だった。私が見つめてみると男の人にも私に気が付いたのか私を見据えた。

この時の出会いが私の運命を変えるだなんて、この時の私は思いもしなかった。ただ湖を背後に話す男の人が幻想的で美しかったことだけは今でも記憶に残っている……。









































## 番外編 「忌まわしき夜」?

番外編 「忌まわしき夜」?

男の人は悠然とこちらへ歩いてきた。そして私の前まで来ると口を開いた。

「お前、なんて名前だ？」

「お、お前!？」

男の口から出た言葉に私は驚いた。だって、周りの雰囲気と男の口調が合っていないんだもん。

「むう、私の名前は結・・・結です!」

「そうか、では結に命令しよう・・・今すぐ帰れ」

男は私の額に指を置くと命令した。

「・・・るい」

「ん? どした」

「ずるいずるいずるい! 何よ! 人に名前を尋ねておいて自分は名乗らないの? あんたの名前教えなさいよ!」

私は男の傍若無人な対応に怒鳴ってしまった。子供だからって舐めるんじゃないわよ!

「俺か? 俺はりゅ・・・正義の味方だ!」

「は?」

男の答えは私の斜め上に行くものだった。

「・・・ねえ、何か反応してよ・・・恥ずかしい」

男は顔を両手で覆って体をくねくねさせて恥ずかしがっている・・・アッって男がやると気持ち悪いのね。

「はあ、変な男」

男の突飛な行動に思わず頬が緩んでしまった。

「クス、やっぱり君は笑っていた方がチャーミングだね」

「なあ!??・・・あ、あれ?」



「ん〜？ 電気がつかない」

私は電気のスイッチを弄った後、2階に向かった。

「お父さん？」

私は書斎のドアを開けて中を覗く……誰も居ない。

「お母さん？」

今度は寢室のドアを開けて中を覗く……誰も居ない。

「お兄ちゃん？」

お兄ちゃんの部屋のドアを開けて中を覗く……誰も居ない。

「もう！ 皆何処へ行ったの？」

私が呟いた時、下の階で何か落ちる音がした。続いて何かを引きずるような音も。

ゴトン、ずるずる……どさっ

どうやら音はキッチンの方からしてくる、私は2階から1階へ降りる。1階へ降りるとそのまま廊下を進み居間へ向かった。

「お父さん！ お母さん！ お兄ちゃん！そこに居るの？」

私は勢いよく居間のドアを開けた、中にはお兄ちゃんが立っていた。

「……お兄ちゃん、どうしたの」

私は足下に気を付けながらお兄ちゃんへと近づいて行った。

「ひ！ お、お兄ちゃんソレって……」

「ああ、なんだ結か……お帰り、結」

近くまで寄るとお兄ちゃんは私に気が付いたようで振り向いた。

「か、顔……血が！」

「ああ、これか？ さっきまでゴミの処理をしていたからさ」

お兄ちゃんはそう言うと言った手に持っていた黒いゴミ袋を床に落とした。黒いゴミ袋はゴトンっと音を立て床に落ちる。

「そ、そうなんだ……ところでお母さんは？」

「……お母さん？ 結お前何を言っ」

「そ、だったよね。お母さんは病院だもんね……それで、

お父さんは？ まだ病院なのかな」

「……そうか、間に合わなかったのか。ごめんな俺がもう

少し早く決断しておけば」

お兄ちゃんとかみ合わない会話を続けていると私の背中を冷たい何かが滑り落ちた。

「でも！ もう大丈夫、ゴミは処理したからな……もう臭くないよ、これからは結もゆつくりと暮らせる！」

お兄ちゃんはそう言いながら私に近づいて来た。

ドクンツドクン

お兄ちゃんが近づく度に私の中で何かが脈打ち蠢くのが感じられる。

「お、お兄ちゃん大丈夫？」

私は後ずさりしながらお兄ちゃんに問いかける。

「ああ、大丈夫だよ……ゆい」

「あう！……何これ」

後ずさっていた私は何かに足を取られて転んでしまった。

「ひい！ く、首」

私の足下に転がっていたのはお父さんだったモノ。

「ああ、まだゴミが残っていたのか……それにしても結、何で逃げるんだ？」

お兄ちゃんはそう言う私の腕を掴んで床に押し倒した。

「嫌！ やめて、嫌だ、触らないで！」

「大丈夫だよ結、これからは俺が守ってやる……お前は俺のものだ！」

お兄ちゃんはそう言うと私の服を破いていった。

「嫌！ やあ！」

お兄ちゃんは私を押さえつけながら服を破いていく。そして遂にお兄ちゃんの手が下着に伸びる。私のお気に入りの熊さんの絵柄を掴んで引きずり下ろす。その瞬間、私の中で蠢いていた何かが外に飛び出した。

「な、何だ！？ これは」

「こ、コツチに来るな！ 来るな来るな来るなああああつあああああああ」

お兄ちゃんの悲鳴を子守歌に私の意識は闇に飲まれていった……。

「うん………」

私が目を醒ますと家の中は真っ暗だった。

「で、電気」

私の言葉に応えるように誰かが電気を付けてくれた。

「あ、ありが」

私は誰かにお礼を言おうと振り向いた。でも、そこに居たのは……  
……お兄ちゃんの生首を持ったガスマスクだった。

「ひい！」

私の頭は恐怖一色で染まり何も考えられなくなってしまった。

そいつは、黒いコートにガスマスクを付けて、昔見た“見えざる恐怖”の殺人鬼「キラ」がそのまま出てきた様な恰好をしていた。

「………」

ガスマスクは私を見つめると急に向きを変えて窓ガラスを割って逃げていった。

そうして私の長い、長い悪夢は幕を開けた……。































































## 第1話 「それぞれの日常」 (前書き)

細かい部分を変えました。イエグハをイエグハ、にクームヤーガの容姿を黒い髪を犬の耳様に逆立て、から黒い髪から犬耳が生えているに。

## 第1話 「それぞれの日常」

### はじめての異世界 第2章 銀の王女編

深夜の荒野に2人の男女の姿があった。男の方は肩まで伸びた黒髪に鋭い目つきをした美少年 龍也。そして、女は腰元まで伸びた黒髪に少しきついイメージを抱かせる目つきをした美少女 結。龍也は胡座を組んで座り、結は龍也の正面で正座をしている。

「ごめんなさい」

結は龍也に謝り頭を下げた。

「頭を上げなよ、結」

「でも！」

結は頭を上げると龍也の右足を見た。龍也の右足は膝から先が無かった。

「大丈夫、大丈夫……どうせ顕現で元に戻るから」

「……でも」

尚も食い下がる結に龍也はため息を吐いた。

「それなら、俺を背負って村まで連れて行ってくれ。それで良いだろ？」

「……分かったわ」

結は渋々頷くと龍也を背負う。

「あら！ 案外軽いのね龍也は」

「意外だろ？」

他愛もない話をしながら歩く龍也と結。

「ねえ、結局ガスマスクの正体って何だったの？」

「あれは……結の心の闇が固まって形を成した存在。言うなれば結の汚い部分のみで作られたもう1人の結だよ」

その言葉を聞いた結は反論する。

「失礼ね！ 私はあんな悪趣味な服は着ないわよ」

「はあ、別に結の趣味が凝り固まった存在だなんて言っていないだろ」  
龍也と結は言い合いをしながら荒野を歩いて行った……。

そこは暗い空間だった。中央に存在する神殿以外は全て闇で覆われた広大な空間。

その神殿の中、最上部の一室にある円卓に6人の男女が座っている。円卓の席は8つ、すなわち空席は2つ。

空いている席は一番入り口に近い席と一番遠い席。  
席に着いている者は皆沈黙を守っている。その沈黙の中、入り口が開かれた。

入り口から入って来たのは30歳程の若い男、銀髪を肩まで伸ばした男はゆっくりと席に向かう。

「諸君、急な招集にも関わらずよく集まってくれた」

銀髪の男は席に着くと周りの者へ礼の言葉を発した。

「では円卓会議を始めますのでございます」

銀髪男の左隣に座るイエグハが会議の開始を告げる。

「よお、今日の議題は何だ？」

イエグハの対面に座るクームヤーガが問う。

「無論、今回落としたロガエスの書の適合者の処遇についてだ」

クームヤーガの問いに答えたのは銀髪の男、ナラトウイス。

「ナラトウイス様、その件についてですが私に考えがございました」

「ほう、考え……とは？」

「はい、ここは静観するのが最善かと」

イエグⅡ八の言葉に皆がざわめいた。

「ほう、卿は何故そう思う?」

「欠片と適合者はお互いに惹かれ合うものでございます。ならば、我らが手を加えずともいずれ出会うのは必然なのでございます」

ナラトウースはイエグⅡ八の言葉に頷く。

「では、その様に……念のため監視は付けておけ」

「はい、お任せ下さいませ」

イエグⅡ八はナラトウースに一礼をすると静かに部屋を出て行った。  
・  
・

カスール村はドーナツツの様な形をした村であった。真ん中に丸い広場があり、広場の周りを家々が囲んでいた。家は木造の家もあれば煉瓦造りの家もあった。特筆するべき点は家々は密集して建っていたということだ。そのため観山達に襲撃された際1つの家に火が付くと瞬く間に周囲の家々に燃え広がり村を飲み込む大火災へと発展していった。

その結果、カスール村の多くの村民が死亡する大惨事となった。そして大火災はカスール村のあらゆる家を焼き、崩していった。

カスール村跡地、

「「最初はグー、じゃんけん……ぼん!」」

今だ残っている瓦礫を足場にジャンケンをする子供達。

「くそ、負けちまった!」

「やっつと、勝てたあ〜!」

「じゃあ次の鬼はカルマだ！」  
言うが早いか3人の子ども達は素早く周囲に散る。

「じゃあ数えるぞ！い〜ち、に〜い、さ〜ん、ご〜お……………」

そんな子ども達の遊び声をBGMに龍也達は崩れた瓦礫を撤去していた。

「良いぞ、ああ、それはコツチだ！」

龍也は壊れた材木を片付ける男達に指示を出す。

「なあ、これはどうすんだ？」

筋肉質の青年が大きな壺を抱えてやって来る。

「それは……………使えるからあつちだ」

「分かった、さんきゅな安藤！」

筋肉質な青年は龍也の指差した方へ行く。

「龍也さん、これはどつちに？」

今度は冴えない青年がやって来た。青年の後ろには数匹の狼が碎けた瓦礫を啜えている。

「それは……………使えないからあつちだ」

先とは逆の方向を指差す龍也。

「解りました、行け！」

冴えない青年は狼達に指示すると龍也の隣に座った。

「おいおい、もう休憩か、早過ぎるだろ」

「良いんですよ……………ほら！」

青年はそう言うのと右手から更に数匹の狼を出すと瓦礫の撤去作業をさせる。

「相変わらず、便利な能力だなあ〜」

「……………」

青年は能力の事に触れられると急に口を閉ざした。

「うん？ どうした犬飼」

「龍也さん、俺……………本当にここに居ても良いのでしょうか？」

































































## 第1話 「それぞれの日常」(後書き)

暗黒教団について

『暗黒教団第1位、ナラトウース』

肩まで伸びウエーブした銀髪に優しそうな顔つきをした男。第1位の序列が示す通り暗黒教団の首領。

『暗黒教団第2位、スススハー』

詳細不明。

『暗黒教団第3位、イエグⅡハ』

白い髪の毛の、のっぺらぼう。実際に顔がのっぺらぼう・・・という訳では無く、イエグⅡハの顔は人には認識出来ない顔の為、のっぺらぼうに見える。暗黒教団、副首領。

『暗黒教団第4位、ナゴープ』

黒いローブを纏った男。ローブの下にある素顔は金色の骸骨、魂の射出”と呼ばれる魔導書を持っている。”

『暗黒教団第5位、チイトカア』

詳細不明。

『暗黒教団第6位、クームヤーガ』  
犬耳が生えている男、黒髪で短髪。犬歯が異様に発達している。  
三度の飯より殺し合いが好きな戦闘狂。

『暗黒教団第7位、ヌガー・クタウン』  
詳細不明。

『暗黒教団第8位、フサツガア』  
詳細不明。

”魂の射出”  
ナゴープが持つ魔導書。表紙の色は黒く、表表紙に赤い手形が付いている。能力は不明。

第1話 「それぞれの日常」 改訂版（前書き）

細かい部分を変えました。イエグハをイエグハ、にクリームヤーガの容姿を黒い髪を犬の耳様に逆立て、から黒い髪から犬耳が生えているに。それと細かい描写を少々。

# 第1話 「それぞれの日常」 改訂版

はじめての異世界 第2章 銀の王女編

深夜の荒野に2人の男女の姿があった。男の方は肩まで伸びた黒髪に鋭い目つきをした美少年 龍也。

そして、女は腰元まで伸びた黒髪に少しきついイメージを抱かせる目つきをした美少女 結。龍也は胡座を組んで座り、結は龍也の正面で正座をしている。

「ごめんなさい」

結は龍也に向かって頭を下げた。

「頭を上げなよ、結」

「でも！」

勢いよく頭を上げた結は龍也の右足を見た・・・膝から先が無い足を。

「大丈夫、大丈夫・・・どうせ顕現で元に戻るから」

「でも！」

尚も食い下がる結に思わずため息を吐いてしまう。

「それなら、俺を背負って村まで連れて行ってくれ。それで良いだろう？」

「・・・分かったわ」

結は渋々と言った感じで龍也を背負うと村に向けて歩き出した。

「あら！案外軽いのね龍也は」

「意外だろ？」

結は男1人を背負っているとは思えない足取りの軽さで歩を進める。

「・・・ねえ、結局ガスマスクの正体って何だったの？」

「あれは・・・結の心の闇が固まって形を成した存在。言う

なれば結の汚い部分のみで作られたもう1人の結だよ」

その言葉を聞いた結は歩を止め反論する。

「失礼ね！ 私はあるな悪趣味な服は着ないわよ」

「はあ、別に結の趣味が凝り固まった存在だなんて言っていないだろ・

・  
・  
」

2人は言い合いをしながら荒野を歩いて行く、そこには以前の日常風景があつた・・・。

同時刻、某所

そこは闇に包まれた空間だった。中央に存在する神殿以外は全て闇で覆われた広大な空間。

闇の中に鎮座する神殿の中、最上部の一室にある円卓に6人の男女が座っている。円卓の席は全部で8つ。

空いている席は一番入り口に近い席と一番遠い席。

席に着いている者は皆沈黙を守っている。

ギイイイ

沈黙を切り裂くように入り口の扉が開かれた。入り口から入って来たのは30歳程の若い男、銀髪を肩まで伸ばした男はゆっくりと席に向かう。

「諸君、急な招集にも関わらずよく集まってくれた」

銀髪の男は席に着くと周りの者へ礼の言葉を発した。

「では円卓会議を始めますのでございます」

銀髪男の左隣に座るイエグハが会議の開始を告げる。

「よお、今日の議題は何だ？」

イエグハの対面に座るクームヤーガが誰にともなく問いかける。

「無論、今回落としたロガエスの書の適合者の処遇についてだ」

クームヤーガの問いに答えたのは銀髪の男、ナラトウース。

「ナラトウース様、その件についてですが私に考えがございます」

「ほう、考え……とは？」

「はい、ここは静観するのが最善かと」

イエグⅡ八の言葉に皆がざわめいた。

「ほう、卿は何故そう思う？」

「欠片と適合者はお互いに惹かれ合うものでございます。ならば、

我々が無理に手を加えずともいずれ出会うは必然！」

ナラトウースは頷く事でイエグⅡ八の考えを承認する。

「では、その様に……念のため監視は付けておけ」

「はい、お任せ下さいませ」

イエグⅡ八はナラトウースに一礼をすると静かに部屋を出て行った……。

カスール村はドーナツツの様な形をした村であった。真ん中に丸い広場があり、広場の周りを家々が囲み、更にその周りを農耕地が取り囲む。家は木造の家と煉瓦造りの家の2種類。特筆すべきは家々が密集して建っていた点だ。そのため観山達に襲撃された際、1つの家に火が付くと瞬く間に周囲の家に燃え広がり村を飲み込む大火災へと発展し多くの命を奪った。思いでと共に……。

カスール村跡地、

「「最初はグー、じゃんけん……ぼん！」」

今だ残っている瓦礫を足場にジャンケンをする子供達。

「くそ、負けちまった！」

「やっと、勝てたあ〜！」

「じゃあ次の鬼はカルマだ！」

言つが早いか3人の子ども達は素早く周囲に散る。

「じゃあ数えるぞ！い〜ち、に〜い、さ〜ん、ご〜お……………」

そんな子ども達の遊び声をBGMに龍也達は崩れた瓦礫を撤去していた。

「良いぞ、ああ、それはコツチだ！」

龍也は壊れた材木を片付ける男達に指示を出す。

「なあ、これはどうすんだ？」

大きな壺を抱えてやって来たのは筋肉質な青年。

「それは……………使えるからあつちだ」

「分かった、さんきゅな安藤！」

筋肉質な青年は龍也の指差した方へ壺を持って行く。

「龍也さん、これはどっちに？」

今度は冴えない青年、犬飼がやって来た。犬飼の後ろには数匹の狼が砕けた瓦礫を啜えている。

「それは……………使えないからあつちだ」

先とは逆の方向を指差す龍也。

「解りました、行け！」

犬飼は狼達に指示すると龍也の隣に座った。

「おいおい、もう休憩か、早過ぎるだろ」

「良いんですよ……………ほら！」

犬飼はそう言つと右手から更に数匹の狼を出し瓦礫の撤去作業をさせる。

「相変わらず、便利な能力だなあ〜」

「……………」

能力の事に触れられると打って変わって口を閉ざす犬飼。



そんな犬飼に思わず苦笑が漏れる。そして、壮絶な勢いで瓦礫を撤去する犬飼を見つめながら龍也は誰にともなく呟いた。

「過去から学べ・・・か」

「・・・俺は」

龍也の呟きは誰にも聞かれる事無く空へと溶けていった・・・。





























































第1話 「それぞれの日常」 改訂版（後書き）

暗黒教団について

『暗黒教団第1位、ナラトウース』

肩まで伸びウエーブした銀髪に優しそうな顔つきをした男。第1位の序列が示す通り暗黒教団の首領。

『暗黒教団第2位、スススハー』

詳細不明。

『暗黒教団第3位、イエグⅡハ』

白い髪の毛の、のっぺらぼう。実際に顔がのっぺらぼう・・・という訳では無く、イエグⅡハの顔は人には認識出来ない顔の為、のっぺらぼうに見える。暗黒教団、副首領。

『暗黒教団第4位、ナゴーブ』

黒いローブを纏った男。ローブの下にある素顔は金色の骸骨、魂の射出”と呼ばれる魔導書を持っている。”

『暗黒教団第5位、チイトカア』

詳細不明。

『暗黒教団第6位、クームヤーガ』  
犬耳が生えている男、黒髪で短髪。犬歯が異様に発達している。  
三度の飯より殺し合いが好きな戦闘狂。

『暗黒教団第7位、ヌガー・クタウン』  
詳細不明。

『暗黒教団第8位、フサツガア』  
詳細不明。

”魂の射出”  
ナゴープが持つ魔導書。表紙の色は黒く、表表紙に赤い手形が付いている。能力は不明。

## 第2話 「それぞれの日常」?

### はじめての異世界 第2章 銀の王女編

真上からサンサンと降り注ぐ太陽の光が広大な森を照らす。静寂に包まれる森の中を2人の男女が並走する。2人の男女は人外の速度で大地を踏み抜き、枝を、幹を、葉を足場に交錯し剣戟を繰り広げる。そして今再び2人は交わる。

「はあ！」

「そら！」

木の幹を蹴り込み女は上段から剣を振るう。それに対して男は地面を蹴り跳躍し、足で剣を防ぐ。空中で衝突する2人。だが力が拮抗した一瞬のうちに男は次なる行動に出る。

「くっ！」

「遅い！」

一瞬遅れて女も反応するがその時既に次なる攻撃は始まっていた。男は女の攻撃を防いだ足で器用に剣を掴むと女を弾き飛ばす。

「きゃ！」

女は木々をなぎ倒しながら吹き飛ばされ、十数m先の大木に激突し地面に落ちる。

「くう………っ」

地面に手をつき起き上がった女の鼻先に剣が突きつけられる。

「俺の勝ちだな、結」

首を傾げながら問いかけてくる男の問いに結は無言で頷いた。

「はあ、また負けちゃった、これで57連敗かあ」

結は近くの切り株に腰掛けるとため息を吐いた。

「まあ、そう気を落とすな。」

男は結の隣に腰掛けると結を励ました。

「でも……はあ、この調子じゃ龍也に勝てる日はいつになるやら」

「そりゃ無理だ！……つーか俺に勝つことを目標にしているのか？」

龍也は不思議そうに首を傾げる。

「ええ、だってロマンじゃない……最初は弱かった弟子が成長して最後には師匠を超えて最強の称号を」

「マンガの見過ぎだバカ！」

熱く熱く世迷い言を語る結に対して反射的に手が出る。はたかれ、結は頭を押さえながら龍也を睨み付け抗議の声を上げた。

「痛った〜い！ 何すんのよバカあ！」

「ああ、そうか今は……悪いな結、つーか俺に勝つことを目標にしているなら既に目標を達成してないか？」

龍也は結の頭を撫でながら問いかける。

「うう……あれが数に入るわけ無いでしょ！ 何が……ふ、ハンデだ。一発だけ好きなのに打ち込むが良い……」

「……よ！ ハンデの一発で仕留められてちゃ世話無いわ！」

「あつはつはつ……正直、斬魂に覚醒した結があそこまで強くなるとは想定してませんでした」

その時の一戦を思い出したのか声のトーンが一段下がる。

「良い？ 私の目標は全力の龍也を倒すこと！ そして龍也の隣に並び立てるような女になること！ それが私の目標」

結は真っ直ぐに龍也を見据えて自身の夢について語る。

「……もしかして、遠回しな告白？」

「なわけないでしょうが！」

結は顔を真っ赤にしながら剣を振るう。

「おっとー！」

龍也は首を横にずらして剣を躲し、お返しと言わんばかりに掌底を喰らわせる。

「甘い！」

「お前がな」

龍也はガードした剣ごと結を吹き飛ばした。

「いいいやあああああああああああああああああ！」

吹き飛ばされた結は木々をなぎ倒しながら森の中へと消えていった。

夜、

仮設ホテルがある広場を龍也と結は歩いていた。結は頭を押さえ千鳥足で。龍也はそんな結を支えながら。

「うっっっ頭痛い！」

「ごめんごめん」

軽い口調で謝る龍也に結の怒りメーターは更に上昇する。

「ほら、もう家に着いたぞ」

龍也はビルのような形をした仮設ホテルの戸を開けると中に入り結を中へ放り込んだ。

「わわ！」

慌てながらも綺麗に着地を決めた結を尻目に龍也は1つの部屋へと入っていった。

「エル……具合はどうだ？」

龍也は天井部に設置された魔方陣に触れてからベッドに向う。

「龍也さま……ええ、大分良くなりましたわ」

ベッドに横になっていたエルは龍也を見ると上体を起こした。

「そうか、それは良かった。ほれ！これをやる」

龍也はベッドの脇に置かれた木製イスに腰掛けるとエルの手元に木製の指輪を放り投げた。



「お休みエル」

龍也は静かな寝息を聞きながら、廊下に出る。

「何か視線を感じたような気がするが……気のせいかな」

龍也は廊下に出ると辺りを見回したが、誰も居ないことを確認するとリビングの方へ歩いて行った。

「……もう、良いですよ」

エルの言葉に応じるようにドアが開かれ結が入って来た。

「バレていたのね……これでも気配を消したつもりなのだけれど」

結はエルの直ぐ脇まで来ると木製椅子に腰掛けた。

「それで？ わざわざ何の用ですか？」

「……あなたに聞きたい事があるの」

少し考えた後そう切り出した結、結の真剣な口調に当てられエルも姿勢を正して対応する。

「聞きたい事とは？」

「龍也の目的そして……あなたと龍也の関係について」

エルは暫く考えた後口を開いた。

「……龍也様の目的ですか？ 昔龍也様が教えて下さった目的は、魔の道を究めること……真実かどうかは分かりませんがね」

エルは少し影を落としながら答える。

「それってどういう意味？」

「そのままの意味ですわ、龍也様は身近な人間にも平気で嘘を吐きますから……」

エルの言葉に眉を顰める結。その様子を見たエルは慌てて訂正する。

「ええつと！ 決して他人を軽んじている訳ではありませんわ！・・・ただ、たまに龍也様の中で得体の知れない何かが渦巻いているのを感じますの」

結は思い当たる節があるのか、少し表情を歪めた。

「心の闇ね」

「はい・・・でも！ 最近の龍也様は心なしか以前より優しくなつた気がします」

言いながら薬指の指輪を優しく撫でる。

「・・・ねえ、少し良いかしら？」

「はい、何ですか結ちゃん」

慈愛に満ちた表情で指輪を撫でるエルを見つめていた結は真剣な表情になるとエルに何事かを話始めた。結の話を聞いていたエルの顔は段々と驚きに染まっていった。結は話し終わるとエルに手を差しのべる。

それに対してエルは何事かを考えるように俯く、そして数秒もしない内に顔を上げると結の手を取った。こうして恋する乙女の夜は更けていった・・・。

















































### 第3話 「それぞれの日常」?

はじめての異世界 第2章 銀の王女編

翌日夕方、

昨日は結の修行やらで丸1日瓦礫の撤去作業が止まっていたため、今日は朝から丸1日かけて瓦礫を撤去していたのだ。

そして空が赤く染まり始めた頃、カスール村跡地には小高い山が2つ出来ていた。

「ようやく仕分け作業が終わったか、皆ご苦労様だったな」

龍也は4、5人の男女を見渡して労いの言葉を述べた。観山襲撃から一週間経た今日、瓦礫の撤去作業が全て終了したのだ。

「連日の撤去作業で皆疲れただろう、今日は家に帰ってゆっくりと休んでくれ」

皆は龍也の言葉に従い、広場の中央に作られた仮設ホテルの方へ歩き出した。一方、龍也はそんな皆を尻目に使えない瓦礫を集めた小山の前まで来るとしゃがみ込んだ。

「影世界発動つと」

龍也は小山の影に触れると影世界を発動させる。小山の影は一瞬で漆黒に染まり小山を飲み込んでいく。

ズツズツズと沈んでいく瓦礫の山。龍也は最後の一片まで飲み込んだところで影世界を解除した。

「これで良しつと、後は時間の密度に耐えきれず勝手に消えるだろう」

龍也は呟くと広場の方へ足を向けた……。

広場までやって来た龍也は4つある仮設ホテルの内1つの中へと入って行った。

「あ~~~~~！ りゅ、龍也さん！？」

「よお、リーン調子はどうか？」

家の中に入ると1人の女の子が駆けてきた。

「め、珍しいですね！ 今日はどうしたんですか？」

女の子は興奮気味に龍也へと詰め寄る。

「ん、今日はミリイに話があつてな~~~~呼んで来てくれるか？」

「はい！」

女の子は綺麗な敬礼をすると奥にあるキッチンの方へ走っていった。そして数分もしない内に戻って来た。

「龍也さん連れてきました！」

「おお、早かつ」

玄関脇に置かれた木製靴箱を眺めていた龍也はリーンの方を見て絶句した。

「だ、だずげで」

「ちょ、ちよつとリーンそれはまずいから！ 締まってるから！」

リーンはミリイの服の襟を掴み文字通り引きずってやって来た。

慌てて止めに入る龍也であったがその時既にミリイの顔色は青を通り越して白に変わっていた。。。

「はふう~~~~.....死ぬかと思いました」

「.....ごめんなさい」

「.....そろそろ本題に入って良いか？」

息を整えるミリイと正座するリーンをよそに龍也はミリイの前に胡座をかく。

「あれ？ そういえば何で龍也さんが此処に？」

「今日はミリイにお願いがあつてな」

龍也の言葉に首を傾げるミリイ。

「何ですか？」

「……ミリイに魔術を教えた人物に合わせて欲しい」

横を向いて恥ずかしそうな様子でミリイに頼み事をする龍也。

「ラグドール様に？」

「ああ、この世界の魔法理論を知りたくてな」

龍也の言葉に更に困惑した様子のミリイ。

「ええつと……どういうことですか、魔法なら龍也さんも既に習得しているじゃないですか」

ミリイはそう言つと簡易ホテルを見渡した。

「このほてゝる、でしたか？ この建物だつて龍也さんが魔法を使つて建てた物じゃないですか」

「確かに……火、水、風、土、金」

龍也は目の前の空間に5つの術を発動させる。

「……たつたこれだけだ」

「え？」

龍也はミリイを正面から見据えると言葉を紡いだ。

「俺はこれだけしか出来ないんだよ……これだけしか」

龍也は自身の前に灯つた5つの煌めきを眺めると術を消した。

「俺には出来る事なんて限られている……だからもつと、もつともつと強くなる！ そのために」

「そのためにこの世界の魔法理論が必要……なんですな？」

ミリイの言葉に頷く龍也、龍也はミリイの手を握ると更に懇願した。

「頼むよミリイ……もう、誰も俺の前で失いたくないんだ！」

龍也の言葉に息を呑むミリイ、ミリイ自身もつい一週間前に家族を、帰る場所を失つたばかりだから龍也の言葉が出来るのだ。

「……分かりました、ただし条件があります」

ミリイは龍也の瞳を覗くと強い意思を持って龍也に問いかける。  
「必ずご自分の信念を……貫き通して下さいね」  
「当然!……もう、あんな思いはしたくない」  
「……なれば、ご案内致しましょう。ラグドール様がいら  
つしやるヴェステイマ火山へ!」

同時刻、ブリュンナグ山脈奥地

標高2000mを越える所に建てられた宮殿の中を歩く少女がいた。少女……と言うよりは幼女と言った幼さだが、綺麗な銀髪をポニーテールにした少女は一人、夜の宮殿の中を歩く。そして一際大きな扉の前に来ると扉を開け中へ入る。

「失礼いたします」

銀髪少女は部屋に入ると真っ直ぐにベッドに向かう。天蓋付きの豪華なベッドには一人の老人が横になっていた。老人は銀髪少女が近寄って来ると体を起こして歓迎する。

「おお、良く来たなフェリルよ」

「ご無沙汰しております、ガランドウーガ様……してご利用とは?」

銀髪の少女……フェリルはベッドの前まで来ると膝をつく。そして強い光を秘めた視線で老人を見た。

「うむ……フェリルよ、お前にして貰いたい事がある」

老人はフェリルを試す様に、問いかける。

「は! 何なりと」

老人はフェリルの言葉に頷くと深く目を閉じた。そして一呼吸すると口を開いた。

「お主にはヴェステイマ火山へ行って貰いたい」

フェリルは老人の言葉を聞くと顔を上げる、その顔には驚愕の表情が浮かんでいる。

「な！？……こんな時に、カルダナ渓谷に魔獣が出現したこんな時に何故？」

「確かに！……確かにカルダナ渓谷に出現した魔獣は厄介だ、カルダナ渓谷は四方を険しい山脈に囲まれた我がノーザンロームが唯一他国と貿易できる要所、そこに魔獣が出現したとあっては国家の存亡が危うい」

老人は強い口調でフェリルの言わんとすることを認める。

「だから、カルデナの魔獣討伐にはファルドーク將軍に当たって貰う……実はな、ここ最近になって”種子”の動きが活発化しておるのだ」

「そんな！？ カルデナの魔獣に種子まで復活したらこの国は」

「終わりだな……だから、そうならない様、お主にはヴェステイマ火山に住むというラグドール老を連れてきて欲しいの……頼めるか？」

「は！ このフェリルにお任せ下さいガランドウーガ様……いいえ、ガランドウーガ王」

フェリルは深く礼をすると部屋を出て行った。

「……頼んだぞ、我が娘よ」

部屋の外に出ると、思わずため息が漏れた。

「ふう……なにやら大事になってしまったのう」

フェリルの口調は先程とは打って変わって老人のような口調に変わった。いや、変わったと言うより戻ったと言った方が正しいだろう。

「まさか、種子が絡んで来るとはのう……想像しておらなんだ」

フェリルがもう一度ため息を吐いた頃、向かいの方から一人の男

がやって来た。軍服に軍帽を目深に被ったその男はフェリルの前まで来ると深く礼をした。

「久しぶりでございますな、フェリル殿」

「おお、ファルドウークか丁度良い、今お主に会いに行こうと思っておったところじゃ」

フェリルは自身に倍する身長ファルドウークにも臆さず、強い瞳で見上げる。

「ほう、してご用は？」

「うむ、腕利きを2人貸して欲しいのじゃ」

フェリルの言葉にファルドークは軍帽の影から覗く双眸を細めた。

「……フェリル様、ご自身の言葉の意味を理解しておいでか？」

「無論じゃ……それでも妾は行かねばならん！」

ファルドークはフェリルの強い意志を秘めた瞳を見ると膝をつき頭を垂れた。

「はは！……我が軍随一の腕利きを選任いたします」

「うむ、頼んだぞ」

ファルドウークは今一度深く頭を下げると、小走りで駆けていった。そうして誰も居なくなった宮殿の廊下でフェリルは漆黒の闇に包まれる空を見上げ独りごちる。

「明日……か、何事も起こらねば良いのじゃが」

こうしてそれぞれの夜は更けていった。































## 第4話 「ヴェステイマ火山の死闘」

はじめての異世界 第2章 銀の王女編

ヴェステイマ火山とは帝国の南方、国境付近に連なる広大な山脈群“ブリュンナグ”の中でも一際高い山の名前である。ヴェステイマ火山は他の山とは違い数十年の頻度で噴火し、灼熱のマグマをまき散らす。流れ出したマグマは木々を飲み込みながら中腹付近まで一気に駆け下りる。そのためヴェステイマ火山の山肌は木々ではなく、溶岩が固まって出来た火山岩に覆われている。

ヴェステイマ火山頂上付近、夜

標高2000mを越える山頂付近、赤黒くごつごつした火山岩が散らばる暗い山道を歩く4人の男女が居た。

「………なあミリイ、本当にコツチで良いのか？」

「大丈夫です！ ラグドール様の元で2年間学んだ私を信じなさい」  
先頭を歩くミリイは後ろを振り向き、自信满满といった感じで胸を張る。だがミリイの直ぐ後ろを歩く龍也は冷やかな視線でミリイを見る。いや、龍也だけではない。後ろに続く結とエルも冷めた目でミリイを眺めている。

「………5回も道を間違えた女を信じると？」

「そ、それは………そうですね！ 道が変わっていたから」  
「分かった分かった、それはもう良いからちゃんと前を向いて歩こ

うな」

ミリイの弁明を切って捨てる龍也、既にマイナスまで冷めた口調が龍也の心の内を雄弁に語っている。

「ねえ、夫婦漫才をやっている最中に悪いんだけど、アレって家よね？」

そう言う結が指差す遙か先、闇の中に浮かぶのは豆ほどの大きさの家らしきシルエツト。暗い闇の中に浮かぶ赤い三角屋根と白い壁面は夜の中でもハッキリと認識出来た。

「どうですか龍也さん！ 私の言った通り」

「さ、さ〜して！ 目的地も見えたしダツシユで行こう！ ダツシユで」

言うが早いか龍也は猛烈な勢いで走り始める。そして、あっという間に遠ざかって行ってしまった。

「はあ、まったくもう・・・私達はゆっくり行きましょうね？」

ミリイは振り向くとエルと結に向かって問いかける。だが、そこには誰の姿も無かった。

「へ？」

ミリイが慌てて前方を見ると、そこには龍也を追って疾走するエルと結の姿が

「ちょ！ こんな場所に置き去りにしないで〜」

一人置き去りにされたミリイは慌てて二人の後を追う。

「はあはあはあ・・・やつ・・・と・・・着いたあ」

「お！ お疲れ様、ミリイ」

数分後、息も絶え絶えに、家にたどり着いたミリイを出迎えたの

は涼しい顔をした龍也だった。

「はあはあはあ……誰の……所為で！……」  
けほっけほっ」

ミリイは龍也を睨み付ける事で抗議の意を伝える。だが、当の本人は飄々と抗議の視線を受け流すと。家のドアへ近づいて行く。

「さて！ ミリイも来た事だし早速ルドル様とやらに会ってみますか」

そう言う龍也は心を躍らせながらドアを叩いた。

「……」

反応が無いことを確認すると、もう一度叩く。

「……留守か？」

龍也は首を傾げ、幻想世界で内部の状況を確認しようとした瞬間、ドアを突き破り何者かが龍也へと襲いかかってきた。

「つつ！？」

咄嗟に身をかがめ蹴りを避ける龍也。

「へえ」

何者かはそのまま龍也の上を素通りし、空中で回転すると地面へと着地した。

「中々やるじゃねえか……面白れえ！」

黒いマントに黒いズボン、そして黒いステッキと全身を黒一色で染めた男は愉快そうに笑うと前方に居る龍也と後方に居るエル達を交互に見つめた。

「くはは、どつちから先に喰ってやるうか……」

男は手に持った黒いステッキを顎に当て考える素振りを見せる。

「貴様は……何者だ？」

「ああん？……そう言えばまだ自己紹介をして無かったなあ」

黒ずくめの男は手を胸に当て礼をする。

「初めまして……で良いのか？ 俺はノーザンローム王国第3師団、団長ヤムーだ！」

(コイツが………亜人って奴か)

龍也は軽く下げたヤムーの頭へ視線を向ける、そこにあるのは犬の様な耳。黒い髪に黒い耳は鋭い視線と相まってまるで肉食動物の様な印象を与える。

男を一通り眺めた龍也は楽しげに口角を上げた。

「へえ………で？ 手前は何だ、自殺志願者か？」

「く、くはははは！ 面白い野郎だなあ」

二人はお互いを睨み合う。龍也は片膝をついたまま、ヤムーは左足を一步分前へ踏み出した恰好のまま。まるで視線を逸らした方が負け！ とでも言う様に二人は微動だにしない。そして、両者の緊張が最高点まで達し、足に力を込めた瞬間。

「止さぬか！ この大馬鹿者どもが！！」

突如響いた怒声によって静止させられた。

「何い？」

「ああん？」

龍也とヤムーは不機嫌そうに声のした方を睨み付ける。龍也とヤムーの視線の先、破碎されたドアの向こうから出てきたのは銀の髪をポニーテールにした少女だった。

白を基調としたゴシックドレスに身を包み、綺麗な銀髪をポニーテールにした美少女は龍也とヤムーを交互に見渡すため息を吐いた。  
「はあ………ヤムーお主は下がっておれ」

ヤムーは銀髪ポニーテール少女の言葉に無言で頷くと家の方に歩き出した。そして、ヤムーが背後に控えたことを確認すると銀髪ポニー少女は龍也へと話し掛けた。

「すまぬのう、お客人。このバカが先走った所為で………だが、妾達はお主と敵対する意志は無い」

銀髪少女はそう言うと言いつつ軽い足取りで龍也へと歩み寄っていく。そして、龍也の前に来るとお互いに見つめ合う。とは言っても、銀髪少女の背丈は龍也の胸辺りまでしかないため龍也が見下ろす形になったが。

「へえ、それで？ 結局あんた等は何者なんだ？」

「うむ先程のバカが言ったと」

「龍也さま!？」

「お姉さま!？」

銀髪ポニー少女が口を開いた瞬間、龍也の後方に立っていたエルと家のドア付近に立っていた少女が叫んだ。次の瞬間、低い地響きと共に地面が崩落した。

「何!？」

「これは!？」

突然、崩落した地面と共に龍也と銀髪ポニー少女は穴の底へと落ちてしまった。後には呆然と大穴を眺めるエル達だけが残って居た・・・。































































## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3675x/>

---

はじめての異世界～The descent of an evil god～

2011年11月19日19時39分発行